
スイ様の言うとおり！

ゆう都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スイ様の言うとおり！

【Nコード】

N3583Y

【作者名】

ゆう都

【あらすじ】

両親と仲のよい弟に囲まれて、平凡だけれど幸せな日々を過ごしていた、くらはし・すい倉橋翠。彼女が突然喚び出されたのは、最高神・シェリラムを信仰する、宗教国家ヴァルモンド。霸王の気まぐれで喚び出され、そのまま側室の地位を押しつけられてしまう。平凡な毎日から一転。望んでもいない厄介事に無理やり巻きこまれていく翠には、誰も知らないある秘密があつて……。執着できないヒロインと、執着させたい王との、静かな闘いのお話。＊ある意味、最強ヒロインです。＊ストーリーの都合上、宗教的な話題に触れることもありま

すが、あくまでフィクションです。実際に存在するすべての物に係りません。

すべての始まり

「なあ、姉ちゃん！」

「んー？」

倉橋翠は、ノックもなしにドアを開け放って入ってきた弟・真也に怒るでもなく間拔けた返事を返す。

「つかー、まあた小ムズかしいことやってんのな。俺、頭痛くなりそうだ」

「小難しいことって……アンタに理解できてんのー？」

翠に促された用件を言うでもなく、可動式の椅子をクルリと回して彼と向かい合う状態になっている姉の背後にあるディスプレイを見て、真也はうへえ、とうめいた。

「なーんも分つかんねーから、小難しいってんの！」

そんな弟の様子に苦笑し、軽口で返した姉に、真也はべえー、と舌をつきだす。

翠自身、そして翠をしる彼女の友人らも認める、仲の良い姉弟。それが、翠と真也の関係であった。とはいえ、ずっと彼女らはこうであつたわけではない。

翠は1年ほど前を思い返して内心で苦笑する。

今でこそ、姉と懐いている弟は今年で15歳。ちょうど思春期と呼ばれる年代で、世間一般に違わず、1年ほど前まで俗に『反抗期』と呼ばれる状態にあつた。

姉である翠とは口もきかず、ピリピリした空気を常に孕んでいて。反抗期というものに程遠い思春期を過ごした翠も、その両親も、彼の扱いには気をつかったつけ。

それでも、受験生となり、勉強に意識を向けざるを得ない状態になって、夜遅くまで勉強する彼の体調を気遣ったり、夜食を用意したりする母や、世間一般に名門と呼ばれる国公立大学に籍を置き、勉強面で大いに頼れる存在である翠に対して、反抗心以外の何かが沸いたようで、今では1年前の面影など少しもない。

「姉ちゃんさあ、明日、行くんだよね？」

「んー？ うん。一応ねえ。でも、大学でプレゼンの準備があるから、現地集合かなあ」

「ふーん、そっか」

翠の本棚から興味のあるタイトルを引っ張ってきては、勝手にベッドに座り込んでパラパラと内容を物色する。そんな弟に文句を言うでもなく、彼女自身、自分のしていたことの続きに取り掛かりながら、片手間に返事を返した。

明日は母の誕生日で、1年ぶりに家族そろって外食をすることになった。

基本、母親の誕生日以外のイベント事では、母が自慢の料理をふるまう家庭であるので、外食などはその母を祝う時にしか行わないと、いうのも、結婚二十数年もたち、子供もある程度大きくなつたとあれば、そろそろ家族団欒の機会は減るもので、特に、仕事人間の父がいる倉橋家はそれが顕著であつた。

それでも、まだ大人になりきれない弟が、久々の外食を内心では喜んでいるのを知っていたので、翠は表面上は興味なさそうに装う弟を思いやる気持ちで見ていたのだつた。

1年に1度の外食。一般の中流家庭で何も珍しくない、その約束事が、果たされないなんて。そんなことは、その時少しも思いはしなかつた。

それは、目も開けていられないくらいの光だった。

家族で外食すると約束した日。家からそう遠くないレストランへは、家から少し離れた翠の大学からはしばらく時間がかかる。

そんなわけで、夕方には学校を出る予定であった翠だが、やはり一度発揮された知識欲はおさまりにくく、予定の時間を1時間近く過ぎていた。

他のメンバーを先に返し、一応の代表である翠が、親しい教授のコネで借りていた研究室を施錠して、その鍵を返しに行く。

念のために少し遅めの時間を告げておいてよかったと、腕時計を見ながら足早に研究棟のエントランスへ向かう。今から急げば、ギリギリ約束の時間には間に合うだろう。

そう、安心した、次の瞬間。

まばゆい光がその場に溢れ、咄嗟に目を瞑った翠を、正体不明の浮遊感が襲った。

王というもの

「これは……」

まばゆい光に焼かれ、いまだ順応の追いつかない目ではぼんやりとした影しか感じ取ることができないが、目の前に1人。そして少し離れたところに、さらに数人の人影が見えた。

聞こえたのは、自分より年上だろう男の渋みのある声。

だがしかし、翠はその言葉に違和感を覚えた。
何を言っただかは理解できた。けれど、その発音は。

……明らかに日本語のそれでは無かったのだ。

呆然と……否、自分を失ったわけではないので、ただ驚いたまま、

前を見つめる翠の瞳が次第にその場の明度に順応するにつれ、人影が確かな形を帯びていく。

目の前にいたのは、翠よりもわずかに年上らしい、男。日本人には有り得ない、銀髪碧眼で、モノクルをかけた学者然とした風貌。服装は、こちらも日本では見ないローブ姿と言ったらよいのか。首のあたりには僅かにループタイをつけたローブの下の様子も見て取れる、漠然としたイメージでは、神父のようだと、翠なんとなく受け取る。

……が、神父よりも似合いの言葉があるとするならば、RPGでいう白魔道師のような存在ではないだろうか、非現実なイメージに苦笑しつつも、そう思った。

その背後に見えたのは……こちらもRPGで言うなら、騎士に違いない甲冑姿の男たちが数人と、それに囲まれた……。

翠はあからさまにその男から目をそらした。身体特徴を言えば、黒髪に灰色の瞳。翠よりは10歳ほど年上……ようするに、30前後に見える。が、その服装は。

RPGに見立てるとするならば、まごうこと無き『王』であったのだ。

「これは、なんということだ？ エリツア？」

「はい、我が君。この少女は確かに、異世界の住人であると思われるます」

エリツアと呼ばれた、翠の目の前にたち、彼は彼で啞然としていた男が、我に返ったように王を振り返り、膝をついて頭を垂れた。

やはり、日本語ではない。その言葉の響きに嫌な予感……否、もはや確信を感じながら、翠はあくまでも黙して会話を聞く。

「ふん。……しかし、見たところ、この国の女と少しも変わらんではないか。異国の女とはいえ、獣の耳や尾が生えていることはないらしいな。……つまりなんことだ。……エリツア、もう下がってよいぞ。俺も部屋へ帰る」

言って立ち上がりかけた男を、しかしエリツアが慌てて止めた。

「お言葉ですが、我が君！」

ホール状の空間に響いた声に男が片眉を挙げる。とはいえ、その様子は頭を下げたままのエリツアに見えるハズもなかったが。

「その前に、1つ。この異世界のものの処遇をお決め下さいませぬか」

「ああ……忘れておったわ。……どこかへ放って……否、そういえ

ば神殿の規則があつたな。不要になつたものも捨てられんとは……
ああ、面倒なことだ。……まあよい、ならば俺の室にでもしておけ。
もしかすれば、異世界のものだ。中々に面白い芸でも覚えるかもしれない。
世話は適当にお前に任せる。……ああ、それでは面白くないな。
お前をそのアーガルに任命するでしょう。いいな？」

「すべからく」

そう言つてさつさと身を翻して部屋を出て行つてしまつた男にエリツアは、そのままの体勢でもう一度頭をさげると、男が騎士を連れて部屋を出て行つたあとで漸く頭をあげた。

男が出て行つた大きな扉の両端に騎士がいる以外は、エリツアと2人きりになる。エリツアはそこで久方ぶりに翠を振り返つた。

「……動揺がない、ということは言葉も通じないか。……致し方ない」

自分を見つめて来たエリツアに合わせて、彼に視線を向けた翠と見つめあつてしばらく。

何も言わない翠に何を感じたのか、エリツアは自分の懷から銀細工の腕輪のようなものを取り出して、それを勝手に翠の左腕にはめた。

途端、魔法でもかかったように、翠の腕の太さに合わせて収縮する腕輪。

「これで、言葉は通じるだろう？」

「……」

先ほどまでの1人言ではなく、明らかな疑問形であったそれに翠は無言で1つ頷いた。

「名は？」

「……翠」

問われるままに答えるスイに、エリツアは1つ頷く。

「ではスイ。混乱しているだろう、お前の質問にも答える。だからその前に、これについてはただ1つも質問することなく、1つだけ、私の言葉を聞いてくれないか？」

翠はその言葉に僅かに首をかしげることです先を促す。

「……。すまないっ……」

血を吐くような、懺悔の言葉が、瞬間、翠へ叩きつけられた。
そして翠は、逃避していた現実と、直面することになるのだ。

自分が、何か非現実に襲われたことを。そして、そこから決して、
逃げることなど許されないだろうと言うことを。

諦めか、覚悟か

「スイ。……否、シイ（様）・スイ・ヴァルフオス・リーリア。私の名はフィオルナル・アイシュ・エリツアールド。王のリーリア（月姫さま）であらせられる貴女さまのアーガルを仰せつかりました。私のことはどうか、好きにお呼びくださいませ」

「……」

言葉は理解できても、男の言った内容はすんなりと頭で理解できるものではなく、翠は二の句を継ぐこともできず、その場で座り込んだまま。

その様子を見てとったエリツアは一瞬……ほんの僅か一瞬、もしも翠が本当に混乱していたのであれば、決して気付かなかったような時間、痛ましそうな色を瞳に浮かべる。

「リーリア、立てますか？ とりあえず、貴女さまの離宮が整うまでは、医務室の方へまいりましょう。慣れない場所で身体に負担が

かかっているかもしれません。こんな冷たいところでは、そうでなくともお身体に障ります。どうぞ、お手を」とりあえず。だ。

翠は自分に差し出された男の手をじ、とみつめる。

そうして、なるべく冷静に、頭の中を整理した。

私は……この世界に召喚された。

それは、もはや現実であろう。なにより、呼び出した張本人らしい人物が、『我が君』と呼ぶような、どうあっても目上らしい役付きの男を前に、私を『異世界の女』であると紹介したのだから。

そして私は、その役付きの男から、何か地位のようなものを与えられたらしい。どうも、神殿の規則やらのおかげで、とにかく『どこかへ放って』おかれることはないようだ、果たしてそれが今後、どう転がるのか分かったものではないので、良いのか悪いのかは、現段階では判断が難しい。

とにかく、その地位の所為で翠と名乗ったにも関わらず、『リーリア』と呼ばれる自分は、目の前の男……エリツアを従者として獲得したらしかった。

とりあえず、分かるのはそんなところか。翠は内心で小さく頷く。大丈夫。自分はちゃんと受け止められている。

……ああ、あとそれから。

どういったわけか、エリツアも、他称『我が君』も正体不明であるはずの異世界の人間に何の警戒もない。騎士が翠を捕らえる素振りは見せないし、地位を与えるのも即決であった気がする。

そして。どうやらエリツアは翠に対して莫大な罪悪感を抱き、その己の心を満足させるために、翠の世話係を比較的、好意的に受け入れている素振りを見せていた。

そう、感じ取ったので。

翠があまりにも反応しないのを勘違いしたのか、ためらいがちに

引っ込められようとした、エリツアの手を、翠は出来る限りの笑顔でとることにしたのであった。

エリツアに引き上げられるように立ち上がった瞬間、翠を襲ったのは、急激な立ちくらみだった。

立ちくらみ、否。正確には違う。その部屋に溢れていた強大な召喚術を成し遂げた魔力の残滓が翠の身体に流れ込んだのだ。

今まで魔力などが存在しない世界で過ごしていた翠の身体には、魔力などというものは存在しない。

しかし翠は、翠であるからこそ、魔力を受け止めるだけのキャパシティは常人では比べ物にならない大きさを持っていたのである。そしてその空洞とも言われる場所に、行き場を無くし、その場を漂っていた魔力が流れ込んだのだ。

とはいえ、急激な魔力の流れは気取られやすいし、翠自身、魔力が欲しいなどとは思っていなかった。そのため、絶対に気取られない身体の内側で魔力の流れを作り、身体に流れ込んだ魔力を、足の裏を通してホールの床に描かれたままの魔法陣にそのまま流しこむ

ことにした。

果たして、全く期待はしていなかったが、魔法陣が再び異界の扉を開くことはない。まるで本来そこにあるべきものだったように、流し込んだ魔力は魔法陣の中にはまりこむ。

カチリと、パズルのピースが填まったような音がした。そしてそれは紛れもなく、翠自身がその世界に填まってしまった音だったのかもしれない。

よろめいた翠に何を思ったのか。

そして、莫大な魔力の流れを果たして彼は掴んだのか、否か。エリツアは翠の腕を引き寄せると、その細腕からは想像できない力で翠を抱き上げた。

驚きに身を固めるが、落ちると痛いので暴れることはしない。となれば、おろしてもらったこともできなさそうで、翠は諦めてエリツアの首に腕を回した。

名前を呼んで

やがてエリツアはそのまま冷たいホールを出ると、瞬間。翠ともども、瞬間移動をしたようだった。

ようだった、というのは言葉通り、翠には一瞬で景色が変る術を推し量ることなど不可能だったからで、ただ、翠がこの世界に呼び出された時のような浮遊感を感じ、同時に翠とエリツアが居る場所も変わったようであつたので、そうではないかと思つたからに過ぎない。

たどり着いたのは、正直医務室とは呼べない豪華な部屋であつた。とはいえ、医務室のような設備も無いわけではない。……現代の日本にはもはや見られない、旧式の設備ではあつたが。

医務室、というよりは入院患者の病室といった感じで、侍医がその場に控えているわけではなかった。

エリツアは宝物でも扱うように翠をゆっくりとベッドの上へおろすと、失礼します、と一言。翠の背中に掌を当てた。

医療魔術、というものだろうか。背中に当てられた掌を中心に、なにか暖かいものが身体の中へ広がっていく。もちろん、それがエリツアの魔力だということを翠は知っていた。

何か治療をしているのではなく、悪いところを探すようなソレに、ただ静かに、翠は魔力を受け入れる。

「先の立ちくらみはあの部屋独特の空気のためでしょう。お体に悪いところはないようです。ご安心を」

やがてエリツアは掌を離すとそう言って頭をさげた。

「そろそろ聞いても？」

「はい、なんなりと」

言って、エリツアはその場に膝をつく。まるで騎士が姫にでもするようなソレに、翠は首を振って拒否を示した。

「私、敬われたくない。私は別に敬われる存在ではないでしょう？」
「いいえ、アナタは王のリーリアにござります」

「……リーリア。……そう、それが分からない。私は翠なのに」
翠は僅かに眉を寄せる。

ワケの分からない呼称で呼ばれ、ワケの分からないままで敬われるなど、気持ちが悪くなりそうだった。意味の分からないまま向け

られる感情は、例えそれが悪いものではなかったとしても、恐ろしく、そして落ち着かないものである。

「それでは私ができることをお話し致しましょう」
言って、エリツアが話し始めたのは、大方、翠の想像通りの物語であつた。

ここは異世界。通常、世界に名前がつけられることはないので、世界自体に名前はないとか。ただ、翠が生活をしていた世界とは、どう考えても違う場所であつた。

翠が降り立った、この国はヴァルモンドと呼ばれる国。

大小の国々が群雄割拠し、まさに戦国時代と呼ばれるべき時代にあるこの世界では、強大な軍事力に、恵まれた資源、たび重なる戦争によって得た広大な面積を誇る、随一の大国らしい。

そしてそれを治めるのが……こちらも予想通り。翠がこの世界に

来た時にその場にいた、他称『我が君』の男。名をギルバート・ヴァルフォス・ド・ヴァルモンドという男であった。

なぜかスイの名にも付け加えられている、『ヴァルフォス』とは王家に連なるものを示すミドルネームであって、王家の傍流や、王の妃となったもの等、少しでも関係があれば、例え正妃ではなく愛妾であろうと、容易く名乗れるものらしい。

もともと、国名であるヴァルモンドだけは王にしか名乗ることを許されていないそうだが。

そして、スイ・ヴァルフォス・リーリアと呼ばれたスイの残された姓、リーリアとは、王の妃に名乗ることを許された姓であった。

この国の妃の身位は全部で5種類。

正妃を指し、妃の中でも最高位を意味する、イヴァリイ朝姫。

王家傍流・または異国の王家出身の妃に与えられる位、カボネ昼姫。

貴族出身の妃に与えられる位、トゥジェ夕姫。

一般階級出身の妃に与えられる位、夜姫。^{ジペット}

そして最後に、商売女、奴隷等、特殊な出身の妃に与えられる位、^{リーリア}月姫であつた。

ちなみに現在、イヴァリイの座は空席。

カポネは1人。

トウジエは2人いるので、これは輿入れの早いものから順に、1を表す『ノ』と、2を表す『デイ』がついて、トウジエノと、トウジエデイがいる。

ジペットは1人。

リーリアは翠が初めてらしいので、要するに、翠の他に4人の妃がいる、ということであつた。

なぜ翠にリーリアの地位が与えられたのかといえ、やはり『神殿』の力。

『神殿』とは、軍事国家に加え、宗教国家の1面を持つヴァルモンドで、唯一、王家に意見を呈することのできる、力ある組織だといふ。その『神殿』が、『異世界のもの虐げること是を赦さず』という不可侵の掟を掲げているのだ。

それならば賓客扱いくらいにしてほしかった……。翠はその内心

を押し隠して、僅かに息を漏らすだけに留めた。

もつとも、最下位の序列とはいえ、王の妃。『リーリア』もそれなりの地位を持つ。

そして、そんな翠に与えられたのが、専用の護衛役兼世話係……この国ではアーガルと呼ばれるらしい、つまるところのエリツアであった。

もちろん、正式な女中や世話係は改めて付けられるというのだが、側妃はそのほかに、アーガルと呼ばれる『専属』を3人まで持つことができという。（ちなみに公私ともに側妃より忙しいとされる正妃は5人までらしい）

このアーガルに関する人事は何かと特種で、例えばその選別方法は2種類しかない。王の任命か、または妃とアーガルになるうとするもの、双方の同意か。

そして1度アーガルになったものは、ある一定の場合を除きその任を解かれることはない。王ですら、許されないのだから相当だ。ちなみにある一定の場合とは、看過しがたい重罪を犯した場合（具体的には国家反逆罪と妃との不貞）と、その死のみ。

妃とアーガルは王ですら介入不能な関係で結ばれることになるのだ。アーガルは例え位階が妃より上でも、妃に逆らうことを許されない、その代わりに、アーガルが位などない、平民どころか奴隷の

出であったとしても、妃のアーガルとして、妃と同位の位階を得ることができるといふ。

とはいえ、本名をフィオルナル・アイシュ・エリツァールドという彼は、神殿の統治者である『師父』を生み出すの家系の傍流の出身で、俗世でも貴族位の扱いを受けるほどの権力者。

しかも、軍事国家でも重宝される、魔法師団を統率する立場である、王宮魔法士長の位についているというのだから、アーガルの立場などは彼にとって従う人間を余計に増やしたに過ぎないのだろうが。

「……ねえ、やっぱり私を翠と呼んでほしいの」

ある程度、国の説明を聞き終わり、その内容を自らの脳内で咀嚼し終えた翠は、もう1度改めて、エリツァ……翠との間ではフィンと呼ばれることになった男へ申し出た。

「お言葉ですが、リーリア、俗世の名を呼ぶことは、後宮ではその身を軽んじていると捉えられます。アーガルである私に、到底許されることでは……」

「それでも。……私はいろんなものをなくしたの。家、家族、友達。今までの生活。一般人としての私。自由。そして、22年間の過去。……世界。……今私に残ってる、元の世界で与えられたものなんて、私の身体と記憶を除けば、この名前しかないの。……この場所で、その名前さえ奪われるのは……ねえ、私は殺されたのと同じじゃない？」

翠の言葉にフィンはハツと目を見開いた。

「リーリア……」

「立場があるというのなら、2人の時だけでもいいの。……私を翠と呼んで？」

「……仰せのままに、シイ・スイ（スイ様）」

そう。ここまで翠が食い下がったのには理由がある。

翠は、彼女の名前だけは、どうしても奪われるわけにはいかなかった。フィンが頷いたのを見て翠は僅かに安堵する。

人の身体は名付けられたときから、その名によって縛られる。多くの術で、真名を大切にするのもその為だ。

だから、翠は身体の制御を保つためにも、翠の名を捨てるわけにはいかない。

その名を誰も呼ばなくなってしまうたその時は、倉橋翠の名を持つ偽物の身体など、消え去ってしまうだろうから……。

「ねえ、だいたい分かったのだけれど、あと3つ教えて欲しいの。

1つめ、何故、私が喚ばれたのか。2つめ、何故、正体不明の異世界の人間を相手に警戒せず、妃の地位まで与えられるのか。3つめ、元の世界に戻る方法は？」

その3つの質問のうち、翠にとって意味のある返事が返って来たのは2つ目の質問のみであった。

1つ目に関してはほぼ、黙秘。王の望みのままに、だということはいえ、フィン知らないだろうが、王の言葉を聞いていた翠になら容易に予想がついた。

それが……ただの、暇つぶし程度のものであるのだと。

だから、翠が知リたかったのは言葉のままの内容ではない。この質問にフィンがどう答えるかによって、彼自身が翠の召喚を望んでいたのか否かが知リたかったのだ。

……おそらく。彼は望んでいなかったのだらう。特に、異世界のものについての規則を掲げる神殿側出身の人間だというのなら、分

からないこともない。けれど、王命には逆らえなかった、ということか。

3つ目の質問は、翠の予想通りであったが、『無い』の1言に付きた。

そして、2つ目の質問。

この世界で、異世界からの召喚術は長い間研究を続けられ、繁栄と同時に、相当普及しているようだった。
その成果として目新しいのは、喚び出すものを選別できるといったところか。

例えば、悪意のないもの、といった制約を加えることで、慣れない世界に喚び出されても、周囲の人間を害さない、穏やかな気性を持ったものが喚び出されるのだとか。

もっとも人気なのは召喚獣で、貴族の間ではペットにするのが流行っている程だという。

絶滅危惧種が知らぬ間に行方不明などとは、召喚元の世界では堪ったものではないが、世界は無限にあるので、喚び出し元を選ぶことはできず、その点ではあまり深い心配はしなくてもいいのかもしれない。

まあ、とにかく、これで翠は納得ができた。仮にも、王の前に喚び出すものなのだ。決して敵には回りえないような制約のもと、自分^が喚び出されたのだらうと思う。

術はある種、世界の理であるから、下手な人の言葉よりも信用がおけるだろう。

その点で、王もフィンも、翠に対して警戒心を抱かないわけが納得できたのだった。

名前を呼んで（後書き）

ゆう都と申します。

初回なので一気に更新してしまいました。

あまり間をあげずに更新続けられるといいです。

ご指摘・ご感想など、遠慮なく下されば幸いです。

彼の理由？（前書き）

11月17日：側室たちの出身を変更。

昼姫：王家傍流 隣国王家

夕姫：公爵家の姫2人 神殿側、王宮側の各名家

彼の理由？

フィンこと、フィオルナルは、元々学者志望の男だった。

物ごころついた時には俗世へ帰り、趣味の研究に生きる日を夢見ていた。とはいえ、一応神殿側名家の出身。望んだ何のしがらみもない生活などできるはずもなく、フィオルナルは魔法士として魔法師団へ士官した。

もともとの地位から指揮官候補者として余暇の十分にとれる生活を送れたのは幸か不幸か。

結果、元々の備わっていた魔術の才能が遺憾なく発揮され、特に『召喚対象への制約の複数付与』の研究では目に見えた成果がでた。

基本的に貴族がお飾りに連れるペットなどを召喚する術はある程度一般的な知識として広く出回っている。

とはいえ、どんなものにも裏がある。穏やかな気性の動物を生み出すことができるのだとすれば、その逆もまた然り。

制約に付け加えるための魔道語は、元々古の神殿関係者が使用していた神語を語源としており、複雑怪奇でその道によほど通じていなければ弄れるものではない。

その点、神殿側名家の出身で、幼いころより神語に触れる機会があったフィオルナルは、魔道語を容易く解し、それを確かな論理によって組み換えることも得意としていた。

そして同じように、魔道語を理解する魔法士が集められる、国の中枢というごく限られた場所では、確かに。……生物兵器としての召喚獣の姿があった。

その開発・研究に対して、フィオルナルの挙げた成果は貴重なものであった。以前の制約付与上限1に対し、現在では3の制約が召喚の魔法陣に付け加えることができる。

要するに……『絶対服従』し、『傷つけることを躊躇わない』『強きもの』の召喚が可能であるのだ。

そしてその国の暗部に深く関わるようになって、フィオルナルは魔法師団長と共に王国魔法士長の地位を賜った。

それから、苦悩の日々であった。

元々士官したとはいえ、フィオルナルは荒事向きの性格ではなかった。そして何より、彼は神殿の教えを受けた人間である。

召喚獣が自らの意思で行うため、という免罪符を振りかざし、軍

事利用されていく異世界の生物。

それを見るたびに、自らの研究がどれほどの害悪なのかと自己嫌悪しない日はなかった。あれほど夢みた魔術の研究が、苦痛に思えて仕方がなくなったのだ。

そんなフィオルナルに王はしかし、絶対の命令をつきつける。

『人間の女を召喚しろ』

理由が戯れだというのはすぐに理解できた。霸王として、軍事大国ヴァルモンドにおいては、その象徴のような王であるし、統治の方にも手を抜かず、賢君とも名高い。

それでも、王ギルバートの女性関係は、王として蓄積された鬱憤がすべて向けられているかのように爛れきっていた。

今まで愛妾として城へ上がった女は数知れず。王の戯れで手を付けられる女中も後を絶たない。

しかし、その女たちが一度、王の心を射止めたと勘違いでもすれば、すぐに王は城の外へ放逐した。王の手付きとなった女たちが、どういう末路を送るのかも知らずに。

それはまだいい方である。女にも原因がないとは言えない。

王はただ飽きたという理由でも、ポンポンと女を捨てた。それで

も食い下がった女たちは残酷に切り捨てられたこともある。

今、城に残っている妃は、飽きたという理由では容易に離縁できない、隣国王家出身の姫と、神殿・王宮の各名家の姫が2人。

それに、どこまでも影が薄く、問題も起さなかったため、その存在すら王に忘れられたのか、飽いて捨てられることを回避できた、女中あがりの一般の娘が1人だった。

そんな王が、城の女中に手をつけるのにも飽き、王に輿入れできるような名家の娘たちは一通り遊びつくし、そうして、興味を向けたのが『異世界の女』であった。

人間の召喚に関し、神殿は明確な規則を設けていない。

否、それは獣相手にはどれほどにも非道になれる人間が、しかし同族の召喚には倫理的な問題を訴えるものおり、それと同時に、意思のある人間を召喚した場合、神殿の規則に触れないように世話をするのがどう考えても、興味とは釣り合いの取れない面倒であるのが容易に想像ができるので、暗黙的にタブーとなっているからである。

それでも、明文になったルールはない。そのグレイゾーンをついて、王が命じる。

フィオルナルはそれに逆らう術を持たなかった。

彼の理由？

当然に、公開できる召喚術ではない。

数名の近衛のみを連れて術を行うのは地下にある、研究所。

研究所とはいえ、デスクワークのためにあるものではなく、論理段階の術を実行に移すための、広くただ、がらんとしたホールである。

成功すれば、その場は名誉や地位を手にする極楽となり、失敗すれば時として自らの命までもを失う地獄にもなる。

フィオルナルは悲鳴をあげる心を意識しないよう、けれども時間をかけて召喚陣を書きこんだ。王との打ち合わせの結果、表向きに付与した制約は3つ。

『人間』『女』『決してヴァルモンドに対し害意を持ちえないこと』。

そして、フィオルナルは王が魔道語に精通していないのをいいことに、今まで誰にも明かさなかった、彼だけが可能とする4つ目の制約付与を行った。

『元の世界に執着しないもの』

そうして眩しい閃光のあとに、彼自身が描いた召喚陣の上に呆然と座り込む少女を目の前にして、フィオルナルは正しく絶望した。

王が決して自らの戯れで喚び出した少女に向けるものではない言葉言い放ち、興味を無くして部屋からさって少し。
様子を変えない彼女に、言葉が通じていないのだと安堵した。

黒髪黒目。珍しい色ではあるが、国内でも見ない色ではない。
見た目も普通の女。どこからどう見ても自分と同じ人間で。けれども、フィオルナルは彼が召喚に失敗することなど無いことを理解しているから、彼女が正しく異世界の人間であると認識していた。
どうして王は彼女をモノのように扱えるのか。そう心を凍らしかけて気付く。彼女を喚び出した自分も、王と同じ、彼女を人と扱わなかった、所詮は同罪なのだ。

地下で座り込んでいるときも、医務室へ向かう時も、医務室で話をしてるときも。

酷く驚いているような印象はあったが、決して取り乱しはしない彼女を見て、自らがなけなしの良心……否、臆病で行った4つ目の制約がうまく働いたのだと思った。

けれども。

彼女が必死に自らの名前にこだわる理由を聞いて、それがただの自己満足に過ぎないのだと分かってしまった。

確かに、泣きわめいたり、激怒したり、絶望したりする様子はない。その点、前の世界に執着がなかったのは確かなようである。それでも。

彼女は確かに人として生きた過去があり、自らがそれを奪ったのに変わりはない。

その上、前の世界に執着がないからと、彼女がこの世界に対し愛着を持っているわけでもなく、所詮、この世界は彼女にとって自らを謂れない制約の中へ放りだした異世界でしか他ないのだと、そう気づいてしまった。

……気付いて、そしてフィオルナルは決心した。

王の命令に半ばやけくそに、そして少しでも自らの罪悪感から逃れるために引き受けたアーガルの役目。それを自らの意思で果たして見せようと。

表向きには異世界からの来訪者だということは伏せられる彼女。

今後は庶民の出ですらない、卑しい出身の妃として不当な扱いを受けることになるかもしれない。

そんな中で、王は彼女への興味を失っている。今、彼女のことを知り、彼女が無くしたという過去を受け止め、認めてやれる人間はフィオルナルしかないのだから。

自分だけは、彼女の中に異世界人であるスイを認め、今は唯一の、この世界での拠り所になろうと、フィオルナルはそう決めた。

自らの中の許されざる罪悪を認識し、それから目をそらすのではなく、受け止め、背負い、その罪の被害者に尽くすのだと、彼は誓ったのであった。

「フィン、おはよう」

そうして今日も、穏やかな笑顔で彼を受け入れる唯一の主人に、
彼は仕えるのである。

彼女の理由

「そういえば、お願いがあるの」

朝食を終え、昨日の今日だから、と一応とばかりに翠の体を医療魔術で調べたフィンがお墨付きを出すと、それに微笑んで礼をした彼の主がふと、思いついたように声をもらした。

「なんなりと」

今日の夕刻までには移動もできようが、まだ、自分の部屋すらない翠に、不便なことも多かろうと、神妙な気持ちで頭を下げる。

「あの、部屋へ行ってみたいの」

「あの……？」

「私が初めてこの世界へやってきた、あの、寒くて寂しい部屋」
思いもよらなかった彼女の『願い』に、フィンは目を見開いた。

「恐れながら……、理由をお伺いしても？」

この世界へ降り立った当時は混乱していて、じつくりと魔法を見分する余裕もなかった。今になって、翠はまだ昨日の今日である、その時のことを思い出す。

今になって考えれば、この世界についてや召喚魔法についての話を聞いたのも、急くようにあの地下室を出た後のこと。

そしてじっくり話を聞いてみれば、ふと、疑問が浮かんだのだ。

『なぜ、私が』と。

翠は翠であるから、自分が魔法とはトンと縁のない生活を送ることに確信を持っていた。否、そもそも地球があり、日本がある、あの世界にうまれた時から、魔法の『ような』と表現できる文明の進化にこそ、目を見張ることはあっても、魔法というそれそのものが、自分の身に影響を及ぼすことがあるなど、あるはずがなかった。

それが、まさか。世界を隔てて召喚されるなどという、おおごと
に巻き込まれるなんて。

想像もできるハズがない。否。そんなこと、ありえないと理解していた（・・・・・・）ハズであるのに。

何が、それを歪めたのか。

「諦めの悪い女と思われるかもしれないけれど。それでも、私の世界と繋がった、繋がっていたハズのあの場所を、もう1度自分の目で、体で、確かめてみたいの。そこに、世界がもう1度繋がるきっかけが、そう簡単に転がっているはずがないことを、しっかりと確認しておきたいの。……駄目？」

自分はズルい。

目の前の、自分に忠誠を誓ってくれているのだらう男に対して、
どうという言葉を並べれば、そこにつけ込めるのかを知って、そして
その通りのことをしてしまう。

翠の言葉にすっかり畏まってしまったフィンを見つめて、翠は口の端だけで自嘲した。

「冷たい、わね」

「地下ですからね。どこからか冷気が流れ込んで来ているのかもしれないません。……お身体に障る前に、戻らねば」

「ええ、分かっている」

翠は小さくうなづきながら、差し出されたシヨールを礼と共に受け取る。

「キレイに、残っているのね」

翠が呼ばれた時とは違った色で照らされた床に、魔法陣はキレイに残っていた。研究に使われる時には壁際の松明にたいまつ聖火が灯される

ようで、そういえば、『あるとき』も赤色が揺らめいていた、とおぼろげながらに昨日の記憶を手繰りよせる。

昨日は赤々と燃えていた松明が、今は黒い炭となってその役目を果たさず、代わりにフィンが魔法の灯りで部屋を照らしてくれていた。

赤に揺れる松明の色と違い、蛍光灯のような白色に照らされて、黒い陣がありありと浮かびあがる。

「陣は魔力を込めたインクで描きます。陣にこもった魔力が消えるまで、褪せることはありません。逆に、魔力が消えるか、術者が命じればあとかたもなく消え去ります。もつとも、陣が残っていても二重に魔法が発生することはありませんが。魔法式はときとして国力すら表す、極秘事項ですから」

それはそうだろう。大型の攻撃魔法一つ、どこかの国に流れるだけで、パワーバランスが崩れそうである。

「自然に消えるまで、どれくらい？」

翠は慎重に魔法陣を見分しながら、視線も向けずに問う。

「1日ほどでしょうか。込める魔力の量で長短を変えることはできます。研究や大事の際につかう場合は、あまりすぐに消えるようには設定しません。失敗した時の原因究明が難しくなってしまうので」

「なるほ……」

フィンの説明にうなづこうとした翠の言葉が停止した。

「シス……っ」

怪訝に思ったフィンが呼びかけようとして声を詰まらせた。
翠が鋭い目つきで、魔法陣の一角を見つめていたからであった。

『人間』『女』『決してヴァルモンドに対し害意を持ちえないこと』
。

あらかじめフィンから聞いていたように、魔法陣には呼び出すモノへの制約が付与されていた。1つ1つ確認していた翠は内心で首をかしげる。

そのような条件であれば、他にも選択肢など山ほどあるだろうに。

そう、思っていた矢先に見つけたのである。

まるで芸術でも見ているかのように、緻密に描かれた魔法陣。フインがその筋で優秀であることが一目でわかり、また、彼の真面目な性格がよく表れているような陣であった。

だからこそ、それは目立っていた。

真っ白で折り目正しく整えられた布に落ちた、1点の黒い染みのように。

キレイに計算されつくしたような陣に、無理やりに作られたスペース。そこに書き足された1つの制約。

それが、『元の世界に執着しないもの』であった。

小さなスペースに押し込むように足された制約。しかし、それを見つけた翠は息を詰まらせた。

たった1点の術式に込められた魔力の量。しかし、それは確実に、フインの命すら燃やしてしまいそうな、強力で、そして執念のよ
うな気持ちの見えるものであった。

これだ、と、翠は反射的に理解した。

これが、翠を喚んだのだ、と。

理解してしまって、目をつむる。次に目を開いた時、翠はフィンに微笑みかけていた。

「戻りましょうか」

「っ……もう、いいので？」

「ええ。ああ、そうだ。どうせあと夕方には消える陣なんでしょうけど……。これ、消してもらえる？」

翠は陣を指して問う。そして、フィンが何か言う前に、更に追い打ちをかけた。

「希望を残したくないので、今すぐに」
「仰せのままに」

フィンは何も言えなかった。

あの願いを。自らの醜い自己満足の文句を描きいれた、あの部分を、彼の主が。否、彼の被害者が、犠牲者が、見つめて立ち尽くしていた。

彼女がソレを見つめて絶句したのを見て、気付いているのか、と一瞬勘ぐった。

勘ぐっておいて、首を振る。

そんなハズはない。否、今に至っては、彼女が万が一、何かの理

由で気づいていたとしても、彼にそれを言及する気は起こらなかった。

この世界の魔法を追求しつづけた結果、彼自身がどんな罪を背負ったのかを考えれば。彼にそんな気が起きようハズもなかった。

陣の制約

地下のホールから戻ると、翠は医務室に籠ることになった。翠がずっと思案顔をしていたのを、昨日の今日で無理をした所為だと判断したフィンが、そうするように提案したからであった。

翠自身、訳のわからない場所で、一応の安全が保障されているかもしれないのに自分から動きまわる意味を感じなかったので、その通りにする。

彼女が地下室で感じたことを、フィンに伝えること、結局その日にはなかった。

彼女がこの国独特の言語で描かれているハズの陣を理解していると、明かしたくなかったのも理由の1つである。しかし何より、どう考えても王命によって無理やり術を使わされているフィンが、命が危ないと分かったからといって、術の行使から距離がおけるとは思わなかったからだ。

彼を助けるには、王を止めなければならぬ。しかし、今の現状

で、翠にそのような力はなかった。

そして何より。彼女がフィンを助けたいのは彼のためではなく、唯一の味方を守るためである……自分のために。それを理解しつくしてしまっているから、より、自分の身を危険に晒すような真似はとる気になれなかったのだ。

気付いてはいたが、自分の薄情さ加減に苦笑して。結局その日１日、医務室から出る気にはなれなかった。

夕方ごろになって、ようやく部屋が用意できたから、と離宮へ移された。

そしてその夜、部屋の外で待機しているハズの衛士が来客を告げる。

その事実には翠は目を見開く。

夜中、序列最下位とはいえ、あくまでも妃の部屋に訪れることを許される客など、１人しかいない。

そもそも彼女の了承すら必要としていなかったようで、翠が返事を返す前に、というか、衛士のすぐ後を追って何の遠慮もなく室内へ踏み込んだ、一応の彼女の夫にあたる男が新しいおもちゃを見る子供か……はたまた犬のような目で翠を見る。

「……先触れなどは頂いていませんでしたけれど？」

王に合図されて、それが当然のように速やかに部屋を出て行ってしまう衛士の後ろ姿を見送って、翠はため息を押し隠して遠まわしに非難の色を示す。

「俺は気まぐれなのでな。そんなものは出した試しがない」

どこまでも規格外だと思う。翠は王・ギルバートのあまりの奔放さに今度こそ、内心でしっかりとため息をついた。

「それより、俺に言うべきことはないのか？　どこの出とも知らぬお前を室にいれ、部屋はもちろん、世話役まで手配してやったのだが？」

よくも抜けぬけと言うものだ。さすがの翠でも僅かに苛立つ。そのどれもが、翠のためではない、自らの享樂のためである。苦々しいものが心の中に湧きあがり、しかし、それが確かな感情となる前に霧散したのに気付いて、翠は僅かに顔を歪めた。

その様子をどう受け取ったのか、ギルバートが嗜虐的な笑みを浮かべる。その様子が視界の隅にうつったが、しかしキレイに無視をして、翠は自分の中で起こった力の分析を優先した。

そういえば喚び出されてから、国に対してこうもハッキリと悪感情を抱いたのはそれが初めてだった。なんだかねで、執着心の薄い翠が特別な感情を何かに向けるということが珍しいことだからである。

それにしても、これが召喚獣に付される制約かと、内心で唸る。結局、思い当たったのは、あらかじめフィンから聞いており、実際に魔法陣にも描かれていた、この国への忠誠の制約。

確かにフィンは力のある術士のような。本来ならば制約は、そのものの持つ本質にしか作用しないはずである。穏やかな気性であること・争いを厭う性格であること等、天性の性質を見極めるものであつて、召喚された後に効果を残すものではないはずであるのに。

確かに、それでも本能のままで生きる獣には十分な効果があつただろう。けれど、それでは周りの感情を受けて、内心で様々な変化を起こす人に対しては不十分な制約のはずだ。

それが。……今、確かに翠の中で生まれた悪感情が霧散したのだ。まるで、翠にはそれが許されていないとばかりに。

翠は内心で自らを操作される吐き気と戦いながら、自らに付された制約を焼き消した。自分の頭の中を解析し、そこに付された制約を、言葉通り、消滅させた（……）。

フィン自身、制約は天性のものにしか付されないと理解している通り、先ほど翠に及ぼされた影響は彼自身、無意識のうちに力を行使したであろうので、制約を取り払ったところで問題はない。

あの陣の意味に気付かず、そのまま儀式を行わせた王にも、たつた今、翠の中で起こった変化を悟ることは不可能だろう。

とはいえ、それほど強力な制約を翠という媒体にかけてみせたフィンは、一体どれほどの魔力を吸いとられたのだろうか……そして、それと共に命も。

翠は内心で唸った。やはりこれ以上、彼に召喚術を遣わせるわけにはいかない。自らを唯一、好意でもって受け入れようと努力している男が死んでしまうのは、いくら自分と、その周囲に無頓着な翠とはいえ、不味いことだというのは容易に想像がついた。

何か手を打たなくては、と、珍しいことに気ばかりが焦る。

しかし、そんな思考をつかの間忘れることにして、翠は自分が誰かに操作されるなどという、許されざる状況から脱することに重きを置いた。自らの気高さを汚すことだけは、誰にも許すことができないものである。

そもそも制御などされずとも、自分の感情など理性で抑えがきくでなければ、すでにこの国など滅んでいるのだから。

翠はどの世界も特別視しない。意識を向けない。そして、執着しないのだから。

「どうした？」

ふと、黙り込んだままの翠に、ギルバートは面白そうにその表情を覗き込む。その様子に僅かに居心地の悪さを感じて、翠はため息と共に吐き出した。

そういえば、この男がまだ居たのだったか。一端、思考の渦から浮上して、目の前の男を見つめる。睨みつけたりはしない。王相手に憤りはもちろん、それ以外のどんな感情すら感じてはいないのだから。

「いえ……私の記憶では、愛玩動物というものは、それらをただ享受するだけのものではなかったかと、思いだしていただけ」

辛辣だったかもしれない。どうせ、私を人などとみてはいなくせにと、そう言ったのだ。

「ほう、自らの立場をよく理解しているらしいな……」

「おかげさまで」

翠の返しに、一瞬の瞠目のうち、犬が狼にでも化けたかのように、どこか酷薄な笑みを浮かべたギルバートは無言で翠の腕をとると、そのままに彼女をベッドへ押し倒した。

「ならばそのまま、俺のすべてを享受してみる」

ギシリと、褥が翠の心のきしみを音にした。

憐み、そして怒り

国、ヴァルモンドすべてに害意などを向けることのない制約を課されている……とギルバートが信じている彼女からの反撃は、果たして酷く弱々しく、彼の衣服をかすただけであった。

万が一、爪が顔に傷でも付けないように、と配慮したのは翠ではあるが、しかし、その僅かな反撃に、ギルバートは驚きを隠せないでいる。

今となつては霸王として君臨し、敵はもちろん、臣下からも畏怖を向けられるギルバートに対し、弱々しいとはいえ抵抗を見せる女がいることが不思議で、しかし面白かった。

内心で食指が動いたのを、しかし決して表には出さないようにして、僅かに翠の上から身体を退かせたギルバートは次の瞬間、翠は挑発的な瞳に対峙した。

「ねえ、アナタは私をどうしたいの？ アナタの言うことに、ただ頷くことしかできない人形たちに、アナタは飽いたんでしょう？」

私に、ソレとは違うものを求めたんじゃないの？ それなのに……そう。私が、ただアナタのすべてを享受するだけの存在になることで、アナタは本当に満足なの？」

翠の言葉に正しく、ギルバートは吞まれていた。見つめた先の、吸い込まれそうな黒が浮かべる挑発的な色が、ふと、彼の見ている前でその色を変えた。一見穏やかそうに目尻の下がった目の中で、映った感情が歪む。それは、怒りではない。反逆の意思は翠から排除されているから。……本当はそうではないのだが、ギルバートはそう思っている。

その、代わりに。浮かんだ感情の色は……。

それを理解した瞬間、サツとギルバートの中にあつた高揚感にも似た感覚がひいた。頭が働く前に、バシリと、ギルバートの手が翠の頬を打った。反射的な、何か。

「生意気な、女め……」

ギルバートは翠の瞳から逃げるように身体ごと視線をそらせると、そのまま怒りを押し殺したような声で呻くように音を漏らした。そうして無言でベッドを下りると、そのまま部屋を出て行ってしまふ。そんなギルバートの背中を見送って。

「かわいそうな人」

先には決して言葉にしなかった心の内を、翠が静かに零した。瞳に今も映っているだろう、憐みの感情を閉ざすように瞼を閉じて。熱をもったままの頬などそのままに、翠は倒れ込むように眠りについた。

「おはようございま……シスイ!!?」

次の朝、未だ決定していない侍女の代わりに翠の世話を全般的に請け負っているフィンが、赤くはれあがった翠の頬に悲鳴をあげた。

「一体、何が……」

「夜中に私とひと悶着起こせる相手なんて、決まっているでしょう?」

「王がここへ?」

翠の言葉に一瞬面喰ったような顔をして、確かめるような声を漏らす。それに1つつなづいて、翠は内心でため息をついた。

正直、自分がなぜあのようなことを口にしたのか分からなかった。

今さら、自分がどのように扱われようと、なんの感情も浮かぶハズがないと、翠には分かっていったハズであった。

ただ。王と……否、ギルバートという1人の男と向き合ったとき、翠は翠だからこそ、気付いてしまったのだ。あの男が、何を望んでいるのかに。

ギルバートは自分の周りにいる女に飽いたのではなかった。彼は、うなづくことしかできない周りの人間に。霸王という、彼の肩書にしか目のいかない人間たちすべてに、辟易していたのだった。

それに気付いて、翠はある種の同情を禁じ得なかった。彼女の立場で、中途半端な干渉など罪だと分かっている。

それでも、気付いた時には彼を挑発して、同情の感情を表に出して。そして、次の瞬間には頬を張られていた。

目の前でことの真意に気付かず、ただ焦り、ただ嘆くフィンに悪いとは思いつながら、真実を告げる気にはなれなくて。

踏み込みすぎた自分への戒めのために、魔法での治療は拒否して、ただ濡らしたタオルでほおの熱を冷ます。

昨夜のことを聞いたそうにしているフィンがそのための腰を据える前に、王の使いがやってきて、翠に無期限の謹慎を言い渡した。

「こんなことが……」

王の使いが去った私室で、茫然とフィンがうめく。

「今に始まったことではないのでしょうか？」

そんなフィンに何を今さら、と言いたげに翠が首をかしげてみせると、フィンがくっついてかかるように顔を向ける。

翠はその様子に苦笑して、フィンが何か言葉を紡ぐ前に、そつと自分の指を押し当てることでそれを留めた。

「シスイ……？」

「フィンが私を大事に思ってくれるのは嬉しい。けれど、それでアナタの立場を悪くするような言葉を言うのは、あまり良いとは思わないわよ？」

主が、自分をかばうような言葉を発したことに、しかしフィン絶望した。あまりのことに絶句したフィンの様子を伺うような主の視線に微笑みを返しながら、しかし背中の中できつく拳を握りしめる。

怪訝そうな顔をした主には気付かれているかもしれないが、しかし、彼女は何も聞かなかった。

確かに翠が発した言葉は、フィンを氣遣うようなものであった。しかし、その罪を認め、背負い、彼女に一生をささげようと決めたフィンにしてみれば、主である彼女よりも自分を優先しろ、との言葉は、彼女からの信頼を得られていない証拠であった。

翠が、彼女をこの世界に召喚した原因でもあるフィンに頼る気になれないのなら、それはフィンの努力が足りない為であり、彼が絶望しようことなど何もなかった。

しかし、今翠が見せた感情は、フィンだけではない、何者の助けも必要としない様子。

彼女を興味本位で呼び出し、徒に側室の地位へしぱりつけた本人が、彼女に無体を強いようとしたにも関わらず、翠が何か特別な感情を感じたわけではない、と、そういうことであつた。
気付いて、愕然とする。

もしも、その彼女の感情が、フィンが課した制約の賜物であるとしたならば。なんと自分は酷いことをしているのかと、ただその感情がフィンを責めた。

同じ人だからこそ、同じ人だからこそ。否、翠が彼の主だからか。なんにせよ、今回フィンは、王という絶対の存在に対し、しかしその理不尽さに怒りを覚えた。フィンですら感じるその感情を、その被害を受けた本人が感じていないのだとすれば、それは正しく異常である。

今まで、相手が人ではないからこそ気付かなかつた理不尽を、一体どれだけの召喚獣に強いてきたのか。考えるだけで、フィンは気が狂いそうな罪悪感に苛まれるのであつた。

憐み、そして怒り（後書き）

お気にいり登録100件以上、評価、感想等、様々な形で皆さまの反応が見られて嬉しいです。ありがとうございます。

書き溜めが切れそうで、更新と追いかけてこな毎日ですが、なんとかいいペースで進めていきたいと思っています。
応援ありがとうございます。

王の名

「王……」

翠はまたも来客を告げた衛士のすぐ後ろについてやって来た男に、あきれ顔を向けた。

「可もなく不可もない顔が、面白い特徴を備えたと聞いたのでな。俺に頭を下げて、平穩を享受する気になったのなら、その言葉を受けてやらんこともないが？」

「わざわざ笑いに来たんですか。王も暇ですね」

尊大なギルバートの言葉に、決して沿うそぶりを見せず、翠は翠で不遜な態度を返す。そんな翠の様子に、王の眉間がピクリと震えて、翠は一瞬、また殴られるだろうかと考えた。

なにも、翠は殴られたいわけでも、ギルバートを怒らせたいわけでもない。ただ、自分を無理やりはこの世界へ召喚した、目の前の元凶に、這いつくばって命を乞いてまで、この世界に居座りつづけるほど、その命に執着もなかった。平穩であるならば、平穩が一番だし、自ら望んでトラブルの渦中に飛び込むほど変わり者でもないつもりだったが。それでも、自らの意思をすべて犠牲にして手に入る平穩を平穩だと、翠は思わない。それだけのことであった。

「はっ」と、ギルバートが乾いた笑いをあげた。

「また起こると思ったか？」

一瞬、身を縮めた翠の様子を見てとつて、それを揶揄するような言葉をなげる。どこか、機嫌がいいとすら思える様子で、翠に1歩近付いた。特に怯えた覚えもないが、反射神経で怯んでしまった翠は、それを指摘されるも、何か言動を起こす前にギルバートに距離を詰められ、またも反射神経で一歩さがる。

「何ですか？」

怪訝そうな顔をして見上げる翠に、王は1歩、また1歩と近づいていく。一方、翠はもう反射神経が反応することもなく、自分の意思では一歩も下がらなかった。

「ギルバートでいい」

「は？」

結局、体がふれあうほどの至近距離にまで詰め寄られ、ギルバートの剣胼胼のできた厚い手の平が翠の頬を滑る。その様子を視線で追っていた翠が目線をあげた先で、獣が笑った。

「お前は俺を王と呼んでいるな。どうせ、俺の臣下でもないのに、敬うような呼び方はしたくないとか、そのあたりの理由だろう？」

「その通りです」

ギルバートの問いに、正直に返す。陛下だとか、我が君だとか、この世界に来てから、目の前の男の他称は、これでもかというほど敬われていて、正直、翠が扱おうと思うものではなかった。別に翠の陛下ではないし、君でもない。形式上、翠はもうこの男の妻であるので、もしかしたら、我が君と呼んで触れない事実が存在するのかもしれないが、翠は1度たりとて、それを認めたことも、そもそ

も許した覚えもなかった。

「くつ。相変わらず正直なやつだ。ならば、名で呼べ。俺は王などという名詞ではない。国に据えられているだけの置き物などにはなつてやらぬ。……いいな？」

「ギルバート……長……いや、なんでもないです」
「ギルでいい」

やはり機嫌よさそうに、笑い声すら漏らして命じた王は、一瞬本音がこぼれた翠を、それでも咎めはせず、代わりに至極呆れた視線で見降ろしてから、ギルバートはため息と共に吐き捨てた。敬称がなかったことに対してすら、何も言わない。

「また、どういう心境の変化を？ 後から咎める理由作りですか？」
「つくづく可愛げのない女め。お前は言ったな。俺は頷くことしかできない人形どもに飽いているのだ、と。俺は今まで、それをそうだと感じたことはなかった。女でこそ、どいつもこいつも俺の顔を伺い、媚びることしかできないのに飽いてはいたが。ああ、確かに。俺は俺の周りの人間どもすべてに飽いているのかもしれない」
猫でもあやすように、翠の頬で遊んでいた手がふわりと離れ、ギルバートが思案げに自分の顎に沿える。

「それで？」

「なに、簡単なことだろう？ お前は毛色が違う。俺の期待した、尾も獣の耳も、羽もなかったが、確かにお前は世界の女とは何か違うようだ。ならば、俺はお前を愛でるまでよ。せいぜい、俺を飽きさせないことだな。それまでは……ふむ。お前の傲岸不遜も、愛い飼いネコの我儘と見て許容してやろう」

ス、とギルバートの手が翠の頬に戻って来て、未だ熱をもったままのそこを撫でる。次の瞬間、翠がそれを感じて、否の声を出す前に、掌が発光し、王の魔法が頬の傷を癒していた。

翠はその力に目を見開く。フィンの、何か信仰に通じる高貴とも呼べるような魔力とは違い、痛烈な力の本流が、しかし癒しの力を持って頬を撫でた。

「これが……王の魔法……？」

「さっそく言いつけを忘れたのか？」

「……ギル」

有無を言わさぬ視線を向けられ、不承不承、愛称のようなソレを呼ぶ。

「魔法が珍しいか？ お前、エリツアの魔法は見たのだろう？」

「彼のはもつと優しい光だった気がする」

「ああ、そうだな。どうも、俺が使うと、目に痛い。もちろん、隠密では消すこともできるが、普段からそんな力の調節は面倒だ。師父が言うには、魔力の量が関係あるとか言っていたが、どうもあの毫碌にも原因は分かんらしいな」

魔法の光の違いよりも、王の様子が気になって内心で首をかしげる。言及する気はなかったが、苦々しい物言いから察するに、やはり王に口添えできる立場の神殿は、霸王からすると目の上のこぶなのかもしれない。

「態度に可愛げがないのだ。せいぜい、顔くらいキレイに整えておけ」

鏡がないので翠には判別つかなかったが、どうやら赤みも腫れもひいたとみえる頬を一撫でして、ギルバートが満足げに笑った。

怒られるのも本意ではないが、かといって懐かれるつもりもなかった翠はその様子に内心でため息をついて。しかし、深く考え込むことはあまりに面倒だ、と放棄したのだった。

3日目の朝

「シスイ（スイ様）」

「おはよう、フィン」

この3日間と変わらぬ朝の挨拶をして見せる翠に、フィンは内心でため息をついた。

王が自らの妃に謹慎を命じてから3日。通常ではありえない冷遇にも関わらず、目の前の主がそれに堪えた様子は、やはりなかった。実際のところ、フィンの居ない間にギルバートは何度か翠を訪ね、その関係は軟化したのであるが、フィンがそのことを知る由もない。僅かの間、暗くなる自らの気持ちを押しとどめ、そんな翠だからこそ、自らが積極的にならなければ、と気持ちを改めた。

「シスイ、昨日を持って貴女の謹慎は解かれました。本日は白の日。^{ハク}アナタにも礼拝の自由が認められています。参られますか？」

聞きなれた敬称交じりの呼び名に、翠は挨拶で答える。

この国……というか、共通言語のあるこの世界では、敬称は名前の最初につけることになるそうだ。

その度合いは上から順に、王族相手や絶対的な主従関係のある場合などにしか使われず、普段はあまり聞くことのない、最高位の敬称『シイ』。日本語的には『様』といったところだが、日本よりも活用の幅は狭い。

次に基本的に使用場面が日本語の『様』と同じ、例えば仕事上の取引関係や手紙の宛名などで使われる『ラッ』。……とはいえ、この国の役職名は敬称込みの単語であり、基本は役職の関わる場での名前の呼び合いはマナー違反とされる習慣があるので、親しい間柄且つ身内間で名前を呼ぶ場合のみの使用となるので、使用機会はこちらも少ない。

例えば日本で社長を『社長様』と呼んだりしないのと一緒に、同じく、妃の地位も、フィンが『リーリア』と呼んでいたように、そのまま呼ぶことができる。

次。年配者への呼びかけや初対面のマナーとしての敬称に使われる『フィ』。日本語訳的には『さん』といったところか。

あとは例外的に、子供やペットにつける『ちゃん』的意味を持った『ミラ』と、学者や師などにつける『先生』的意味を持った『ギオ』があるらしい。

のであるが。何より、その使い方として日本と違い珍しかったのが、親しさや、さらなる敬意を表す手段として、敬称を名前にくっつけて呼ぶ習慣があるところである。

例えば『シイ・スイ』なら、フィンも呼んだ『シスイ』になり、日本でいうあだ名の感覚があってまた面白い。……もっとも、フィ

ンはあだ名感覚で呼んでいるわけでは絶対に無いのだが。

この3日であれば、翠の様子に何かを耐えるような表情を浮かべたフィンは、そのまま朝の身支度の手伝いを行うのであるが、挨拶の後に続けられた言葉に翠は首をかしげた。

「なるほど、シスイのお国とは信仰も違うらしい……否、当然のことでしょう。この国は最高神シェリラムを信仰しております。週に1度、白の日には朝食前に礼拝を行う習慣が、貴族階級・庶民階級問わず、広く存在します。私も参るところですので、よろしければお供いたします。……と、どうかこの国だけではなく、この世界のあらゆる国がシェリラムを信仰していますので、他国出身のシスイも礼拝をされるのが自然かと……」

異世界出身を隠している翠を慮るフィンの言葉に、翠は僅かに考え込む様子で指を顎に当てた。

ちなみにこの国の天体や暦はほぼ、地球と同じであった。

太陽1つに月1つ。1日も24時間で、時計も元の世界にあったものと同じ。もっとも、その価値は、庶民では到底手の届かない貴重なものであるらしいのだが。

1年は12か月で365日。ではあるが、微妙に1週間と1月の概念が違った。

まず、曜日。

休息日である白の日から始まり、赤・青・緑・黄の日と続いて、黒の日で終わる。これら6日で1週間。ひと月は5週間あり、30日で1カ月となる。1年はそれが12カ月。ただし、年の初めに月にも週にも含まれない、色の無い日が5日、日本の三箇日のような感じで祝祭日として存在し、それを合わせて1年が365日と数えるのであった。

ちなみに、うるう年の概念はない。

で、どうやら白の日は日曜礼拝の様子で礼拝があるらしいが……。

『シェリ（千）ラム（宝）』。この国の神語らしい言語で『千の宝』と呼ばれるその神が、異世界の出身である翠とどういう共通認識を持てるモノか。翠は嫌になるほど理解していた。顔をあげ、翠の返事を待っている様子のフィンに苦笑を浮かべる。

「……悪いけど、礼拝はしないでおく」

「シスイ？」

「元の国は無宗教を貫いていたの。宗教関係で乱れた国も、周りにはいっぱいあったしね。今更、神を信仰する心は持てないし、なによりそんな状態で礼拝にだけ顔を出すって言うのも失礼だと思うから」

言葉を選んでごまかす翠の言葉に何を思ったのか、しかしフィンは1つ頷いて翠に自由を許した。

3日目の朝（後書き）

閑話的なものでした。

シスイと呼ばれる理由と、この世界のアレコレ。

祈らない理由

「お前の国には宗教がないのか」

「……またですか、王」

今回は衛士すら通さず翠の部屋に入って来た、一応の夫に翠は呆れた表情を浮かべる。そんな翠に対し、相手も相手なりに不満があったようで、眉間にしわが寄った。

「王とは呼ぶなと言ったはずだが」

「……ギル」

3日前の命令はあの日限りのものではなかったらしい。もちろん、翠にそんな気持ちはないが、一応、愛称よりは敬意を表しているだろう呼び名を否定され、翠はヤケクソ気味に名を口にする。

それに何故か、満足そうな表情を浮かべる王・ギルに翠はため息をつきたくなるのを我慢した。

「この国で礼拝を欠かす者など、俺以外にいないと思っていたのだから」

どうやら、未だ礼拝の時間が続いているらしいこの時間帯、1人でふらふらとしている彼も、神を拝まない人間であるらしい。一応、表向きは宗教国家であるのに、嘆かわしいことだ。自分が礼拝を欠席したのは、異世界人だからだと棚上げして、翠は内心で囁く。

「そりゃあ、私はこの国の者じゃないもの。……そういうギルはそもそも信仰していないように」

「俺は神などという存在は信用していないのでな」
正直なギルに苦笑を浮かべる。拝む、拝まない以前に、『いない』と来たか。

宗教国家と聞いていたので、その代表が無神論者だとは想像もつかなかった。新鮮な意見に、つい、くつり、と喉を鳴らしてしまう。そんな翠の様子に、ギルは器用に片眉をあげて怪訝を示した。
「なんだ、お前は違うのか？」

「……元の国は無宗教だったけれど、私自身は神はいると思っていますよ。ただ……信仰などという対象にはならないだけ」
翠は神の存在を知っている（……）。ただ、『拝まない』だけだ。

「ほう？」

翠を感じた物珍しさを、ギルも翠に対して感じたようで、面白そうに瞳がきらめいた。

「アナタもこの世界の王なら知っているでしょう？ この世界の他にも世界は数多とある。万が一にでも神がそのすべてに目をかけていたところで……いったい神の元にどれだけの数の祈りが届いているのか……。怒涛でしょうね。そして神は公平なの。残酷なほどに平等。……平等に、下々の人間の祈りなんて……無視するのよ。そんな神に祈りを捧げる意味を、私は感じていないだけ」

真実であつた。否、もっとひどい。

この世界の神は、いくら届いたところで、無視以外の選択肢を許されない願いの数々に、それを聞くことすら嫌気がさした。今現在では神のもとに届く願いなどはない。すべてがその前段階でシャットアウトされるのだから。いくら熱心に祈ったところで、祈った先には届かず、無慈悲な壁にはじき返される。

それよりもなによりも、今、神は不在であるのに。

「平等に残酷な神に、短い人間の一生から祈りの時間を捻出して差し上げてるなんて」

バカみたい。

酷薄に呟く翠の言葉に、王は声をあげて晒った。

「遠慮のない女だ。……エリツアはともかく、神殿の連中の前では言っなよ。首が飛ぶ」

「あら、大丈夫でしょう。だって私は異世界のモノだもの」
神を恐れる神殿の人間に害されることなどない。

「まあ、アナタの前くらいでしか言えないけれど。……ただの信仰ならともかく。盲信や狂信ほど怖いものはないのだから……」

翠はそう呟いて、ため息と共に乾いた笑いを吐きだした。

祈らない理由（後書き）

そろそろヒロインの正体が分かってきたかと。次で一応謎解きです。

せかいのおこり

むかしむかし、その世界は闇に覆われていました。

いえ、そもそも世界の概念すら生まれる以前の事です。

そこには、ただ闇があるだけでした。

いえ、それは闇ですらありませんでした。

そこにある（・・・）のはただの無でした。

時間という概念すらない中で、とてつもない時間が流れました。

それを感じる存在すらおらず、ただ、無為に時間は過ぎ去りました。

やがて、1点の光が浮かび上がりました。

そして、光に照らされない部分には、闇ができました。

なぜその光が生まれたのか、分かりません。

なるべくして成った。

なぜなら、それが最高神シェリラム様だからでありました。

シェリラム様は、まず闇をとりこまれました。

光があるところに、闇は存在する。

しかし、光があるからこそ、闇が存在するのです。

闇が存在しても、光は存在することがなく、その場の闇は、ただの無となります。

シェリラム様はだからこそ、自らの対極に位置する闇さえも、統べることが可能でございました。

次に、シェリラム様は使者をつくられました。そして、その使者に一切の自由を許しました。自らに反抗することすらも、許容なされました。なぜなら、それはシェリラム様が最高神であらせられたからでございます。

シェリラム様は、その強い力故、自らと使者を決別させました。そのことで、シェリラム様は最高神として、すべての使者を、平等に公平に、司ることが可能となりました。

シェリラム様に自由を許された使者たちは、最高神たるシェリラム様に己の意思で、全員が下りました。シェリラム様を前にして、いくら許容されようと、仇を成すものなど、現れようはずがなかったのでございます。

それを喜んだシェリラム様は、最後の宣託として、使者に世界の作り方をお教えなさいました。

皆に平等に、公平に、作り方をお与えなさいました。

シェリラム様に世界の興りを任された使者たちそれぞれが、あまたの世界を作り出しました。こうして、今にある多くの世界が興ったのでございます。

ある世界では、使者に世界を任された下級神たちが、争いを起こしました。

ある世界では、八百万もの下級神が生み出され、あらゆるものを司ることで、世界の調和がおりなされました。

ある世界では、邪な物に唆されて知恵をつけた人間が、地上に降りて世界を創る人々を増やしました。

様々な世界で、1つと同じもののない物語が創りだされて行きました。

シェリラム様は、時に悲しく、時に嬉しく、それらを見守られておられます。

そのまなざしがあるからこそ、世界を任された使者はシェリラム様の意思に沿い、そうして私たちが今、存在するのでございます。

世界の興り

パタン……。

翠は子供用に創られた薄い絵本を閉じて、重い息をついた。どこにでもよくある創世記である。

「シスイ、やはり慣れない神話は難しく感じられましたか？」

翠がこの世界にやってきて、初めての白の日のその翌日。翠がこの国の宗教に馴染まないことを知ったフィンが、気を聞かせて持ってきたのがその本であった。

魔法具さえあれば問題ない、言葉や文字。奴隷だから、生活が悪かったから、と言いつのける時事やマナー。それらよりも。奴隷でも、幼子ですら知っている、宗教は、最低限、学んでおくべきである、との配慮であった。

「いえ……。私の知っているものとよく似てたから、驚いたのよ」
「そうでしたか。その神話は、実際に使者の声を聞いた師父の先祖の代、未だ文字もなかった遙か昔の頃より、口伝で伝わり始めたもの、といいます。シスイが誕生めされた世界でも、同じように伝わ

っているのであれば、その内容は似ていてもおかしくございません」
翠はその言葉に小さく唸った。

「使者の声を聞ける者がいたの」

「遙か昔は、大勢いたそうでございます。魔法の力も、今より強力だったとか。力が弱くなるにつれて、使者の声も届かなくなりまして。今の師父の息子は、まるで先祖還りのように力が強いと噂ですが、それでも使者の声を聞けるものには到底及ばないかと」

なるほど。使者から直接聞いたのであれば、翠が一般常識程度に前世で仕入れた知識と被る内容があってもおかしくないかもしれない。

翠が考えていると、ふと、フィンが翠の顔色を伺うような様子を見せた。

「何？」

「いえ。無宗教だとおっしゃったシスイにこのようなお願いをするのは迷惑だとは思いますが。この世界の話がよく似ているとおっしゃった。ならば、どのあたりが違うのか、神殿由縁のものとして興味がありまして。もちろん、神殿の人間へ漏らすようなことはいたしませんので、お聞かせ願えませんか？」

首をかしげてみせた翠に、フィンがいいにくそうな様子を見せる。そんな様子に翠は、そういえば一応、神学者まがいったたか、と思いだして、分野は違うが同じ研究者として知りたい気持ちも分か

るな、と苦笑した。

「私の世界では宗教はいくつかあったの。宗派の別れたものを数えれば、私もよくは分らない。だから、その中の1つが似ていた、というだけ。私がもっともよく知っている（……）、ストーリーの1つが、ね」

「シスイはその宗教を信じてはおられなかったのですか？」

「信じているのと、信仰しているのとは、別問題」

フィンの言葉に翠は1言だけ、返事を返す。

「それは、どういう？」

「言ったでしょ？ 宗教を理由にした戦争がいくつもあった、て。

そういう話もあるかもしれないな、てただ単純に思うのと、その話を生活レベルまで落とし込むのとは別、ってこと」

「なるほど。確かに、この国の外には、シェリラムを信仰しつつ、しかし政治や生活とは切り離している国もあります」

「ま、そんな感じよ」

翠は本当の理由を隠して微笑んでみせる。フィンを信用していないわけではない。けれど、神を信じ、信仰する人間の前で、その神は信仰に値しないのだ、などという気はなかった。

「そう、それで……似ていない、ところだったわね」

翠が話したのに、フィンも姿勢を正して注目した。そんな様子に苦笑して、続ける。

「確かに、シェリラムは公平で公正だった。それ故に、世界を見守ることを、平等に、止めたの」

「止め……た？」

「そう。病に苦しむ民の声。為政者の理不尽に怒る民の声。貧困にあえぐ民の声。それらはすべてシェリラムに届いた。けれど、シェリラムは最高神であるが故に、出来上がった世界に手を出すことができなかった。民の望みに答えられないシェリラムは、見守ることを止めたの。世界のことは、その世界を創った使者がすべき。そう決めて、救いの声を耳に入らないようにした。祈りの声を弾き返した。長い時がたって、見守らないシャリラムに使者が呆れ、救わないシェリラムに民は諦めた。そうして、民は使者や、使者の創った下級神を仰ぐようになったのよ。……それが、私が1番詳しい、神の物語」

翠が語り終えると、フィンが絶句した。

「フィンも呆れた？ 救わない神様に」

「なんと……お劳しい」

フィンの口から茫然と漏れた言葉に翠は苦笑する。けれど、何も言わなかった。

「シェリラム様は何もする必要がないというのに。人が自分勝手に祈ることに対して、お心を痛める優しき神ではありませんか。それなのに、使者は呆れ、民が諦めるなど。シェリラム様が存在する、そのことが唯一大事であるのに」

ただ、居るだけでいい。それがどれほど辛いことか、知っているのだろうか。

思わず心によぎるものの、それに感情が伴うことはない。

「そう、ね」

乾いた口でそれだけ返事を返す。

「あ、いえ。すみません。翠様のお国のお話に私がどう言おうと、何の関係もないのに、でしゃばりました」

「いいのよ。アナタはそういう立場なんだから。……喋ったら、喉が乾いちやった」

「ただいまお茶を」

言って、フィンが部屋を出て行った。それを見送って翠は笑う。

ただ、居るだけでいい。そう、あの男は言った。
本当に、そうだろうか。

フィンに語った神話には続きがある。

見守る、という唯一の仕事を投げ出したシェリラムは孤独になった。

何も聞こえず、何も見えず、あらゆる感覚の消えた無の中で。ただ、無為に時間を過ごすことになったのだ。

世界に平等に関わらないとは、そういうことであった。

そして、シェリラムは考えるのだ。

使者が独立し、その使者が世界を治める。その中に、自分は必要ではないのか、と。

だからこそシェリラムは、天界にただ居る、という役目すら放り投げて、そこから姿を消したのだ。

前代未聞の神の不在。

「そりゃ、誰も信仰なんかしないわよねえ」
誰も居ない部屋で1人、翠は乾いた笑いを洩らした。

世界の興り（後書き）

登場人物への謎解きはまだ先になりますが、
ある主の、人外ヒロインの形。

読者様にどう受け入れられるか、少し心配でございます。

赤毛の男

「お！ おはよう、リーリア」

次の日の朝食後、ある程度 of 自由を許されている翠は、外の空気を吸いにでも行こうか、と部屋を出た。……出たところで、そこに控えている衛士であるはずの1人が声をかけて来て、足を止める。

「……普通、こういうのって声をかけちゃいけないんじゃないの？」
余りにも気安くかけられた声に呆れた顔を浮かべ、翠は衛士を振り返った。

くすんだ赤銅色の髪に、金色の入った瞳をしている。なんというか……女に好かれそうな、それを利用してあれこれやってそうな顔立ちだと思いながら尋ねてみた。もちろん、心の声は絶対に聞こえないよう、封印しながら。

「んー？ まあ、暗黙のルールってのはあるかもしれないが……隊の規則にそんなもんはないからなあ……。あ、ちなみに、俺の名前はルーカリアナ・バレット。今日から、リーリア担当の衛士になったから、よく顔も合わすと思う。……ル力でいいぞ」

「……ならル力。……でも、ルーカリアナって珍しい響きね」
敬語さえ使わないル力の様子に、内心で諦めながらしかし、相手に気取られないように、僅かに警戒心を強める。

さすがに任務中、相手がもしも翠より位階が下であったとするなら、翠に不敬を働くようなことはすまい。……否、公私の区別もつ

かないような役立たずであるならば別ではあるが、目の前の男からはそうではない……むしろ、曲者であるような気配が読み取れる。

で、あるならば。翠は妃であるとはいえ、その中の位階は最下位であるリーリア。正直、リーリアの位階であるならば、宮中の、しかも妃が住まうような奥まった場所で出会うような役付きであれば、むしろリーリアの方が格下になる場合が多い。

もっとも、妃は王の所有物という見方をされているので、王の威を借りて、それら目上の者に対しても、常識程度でへりくだっていれば、過度に謙譲しなくとも大丈夫な程度には、身分の保障はされているのであるが。しかし、要するに『リーリア』よりも目上のものがそれだけ多いのだから、目の前の衛士もソレに当たるのでは、と思ったのだ。

たかが『リーリア』の衛士にそれほどのものがつくのか、という考えも無きにしもあらずではあったが、例をあげれば、そもそもアーガルであるフィンが、王国魔法士長という、王に次ぐ権力者のうちの1人（神殿関係者は除く）。ようするに、翠よりも目上にあたるのであるから、有り得ない話ではない。

なにより、目の前の男から漂う、曲者っぽい違和感。もしかすれば、衛士の中でも相当上、どこるか、もしかしてギルが身近な近衛から選んで衛士としてつけた可能性もある。

そしてその可能性が真実だった場合、目的は翠への警戒以外に他ならない。自らの手ごまの中で優秀な人材をつけることで、決して翠の異質性に調子を狂わされることなく、また翠の出自をバラしても問題なく。ギルが気まぐれに玩具にしても下手に騒ぎ立てず。ただ、確実に翠を警戒し、見抜き、そして誰にも奪われまいと守る……考えれば考えるほど、有り得そうな話である。

優秀な手ごまから人材を出すことも、自らの力を一番信用しているようなギルならばやりかねないし、翠に対する独占欲だって、自分のものを取られまいとする態度は、あのギルであるならば容易に想像がつく。いかに価値のないリーリアであっても、他人に盗られるのは別問題として嫌がりそうである。そうでなくとも、最近のギルの様子から、以前にはない僅かの好奇心を感じているのだから。

もっとも深く考えずとも、フィンの時と同様で「面白そうだから」という、相変わらずの気まぐれに重きをおいた理由である可能性も、随分高いことが虚しいが。そう考えて、思考を投げた。……無駄だ。

「そうか？ 珍しくない名前だぞ？」

「ええ……でも、珍しくないのは女名としてじゃない？」

そう考え至った翠はある種の意趣返しとして、ルカに質問を返した。途端、目を見開くルカに、少しは思惑が成功したのだと、心を静めた。

「よく、分かったな……他国出身らしいが、この国の名前まで知ってるのか？」

「そうじゃないけど。ただ、aの音が最後にくる名前は、どの国でも女に多いものじゃない？ o音が男に多いように」

翠の澄ました顔にル力は苦笑を浮かべる。

「その通り。昔っから、よくからかわれてたんだよな。だから、からかうなよ。幸い、ル力なら男名としてもよくあるんだからな！」
念を押すように、無邪気な顔を浮かべて翠に語るル力に、翠は苦笑して頷いた。目の前の男の面の皮がとりあえず、そうそうひっぺ返せないくらいには厚いことが分かった。

そういえば散歩に行こうとしていたのだ、と部屋を離れようとした翠に、ル力が付き従おうとしたのを見てとって、翠は気楽な散歩を諦めた。とはいえ、部屋に詰めたままでも息が詰まるので、城内でも見はらしのいい回廊まで、軽く出歩くことにする。

さすがに、城で働く者とすれ違うことも多い廊下で、ル力が気楽に話しかけてくることはなく、それでも翠は居心地の悪さを感じて、早々に部屋まで戻って来た。

学者兼魔法士で、根っからの文系であるフィンとは違い、ル力が

歩くたびに聞こえる武具の擦れる音が気になって仕方がない。とはいえ、仕事中に外せと言えりわけもないし、護衛についてくるなどいうのもおかしいし。そして決める。出歩く時は、フィンと呼ばうと。

城仕えの少女

「リーリア、ちょっといい？」

結局、部屋で書き取りの勉強をすることにした翠が、扉の外からルカに呼ばれた。ノックの後で声が聞こえる。

一瞬、ほんの僅か一瞬、眉を寄せたものの、翠は扉に近づいた。
「なに？」

書き取りのための本を取ろうと立ち上がったところだったのもあって、入室の許可を返す前に、自らの手でドアを開けた。と、そこに翠と同じくらいの身長少女がいた。

……女の平均身長も日本よりグッと高いこの国のこと。一見『少女』に見えるらしい、翠と同じくらいの身長ということは、まさに『少女』の年代なのであろう。

身長は翠と同程度ながら、確かに表情にはあどけなさの残る彼女に、翠は首をかしげてみせる。

「私を呼んだのはアナタ？」

「は、はい！」

「今日からリーリアの侍女になるんだって」

翠の言葉に少女は元気よく返事をし、その隣でルカが説明をする。

……少女の上司である自分よりも、管轄違いの衛士の方が新しい侍女に詳しいことに内心でため息をつきながら、翠はゆっくりと少女に視線を合わせる。

ルカもそうであるが、漸く、翠の周りの人間関係が固定されてきたらしい。

「初めまして。知っているでしょうけれど、翠よ。アナタは？」

「へっ！？……あ、アシュレイ・ドッティバルです！」

大きな声で返事をした侍女・アシュレイに翠は笑う。

「城仕えの女中は家名を名乗っちゃいけないでしょう……？　ま、慣れてなさそうだし、聞かなかったことにしておくわ。ね、ルカ？　……けれど、他の人の前ではうっかりしちゃだめよ？　怒られてしまふとかわいそうなもの」

もつとも、公の場でないのであれば、女中の家名など、入り乱れて飛びまくりであろうが、いちおう花嫁修業をしている貴族の令嬢も、一般庶民も、わけ隔てなく扱う、という『タテマエ』から、公の場では家名を出してはいけない、という女中の間のしきたりがある。

もちろん、花嫁修業に婚活まで含んでいる、一部の貴族令嬢は、こっそり家名をつかって将来有望なものや、貴族相手に自分の押し売りのしまくりであるのだが。

とはいえ、うっかり家名を出してしまうような目の前の少女は、本当に慣れていないだけの一般人なのであろう。そう思いいたって、そもそも、そんな『タテマエ』のしきたりを破ったからと、罰せら

れるようなものでもないので、穏やかになかったことにした。

「も、申し訳ございませんっ!」

「……別に怒っていないし、謝らなくていいわよ。それから、私、できるだけ自分のことは自分でしたいの。アナタの仕事をとってしまつこともあるかも知れないけれど、どうか許してちょうだいね。私、女の子の知り合いは宮中に少ないから、アナタはその分、私の話し相手をしてもらえとうれしいわ?」

勢いつけて頭をさげたアシュレイの肩を叩いて慰めながら、翠は『お願い』する。

「は、はい。リーリアのお話し相手を務めさせていただけるなんて、身に余る光栄です!」

「ありがとう。それじゃ、まずはお茶を淹れてもらいたい。お願いしてもいい?」

「かしこまりました」

小首を傾げて頼んだ翠に、侍女の顔をしたアシュレイが優雅に頭をさげる。

そうして、廊下の奥へ消えたアシュレイを見送っていた翠に、ふと、感嘆の息がおちた。

「なに？ ルカ」

「いや、誑しこむのが上手いねえ、リーリアは。オレも見習ったら女の子と仲良くできるのかなあ？」

「……」

ここ数日、正式な侍女が就くまで入れ替わり立ち替わりしていた女中連中を悉く、言葉通り誑しこんでいた翠は、しかしそれを知らないハズであるルカの言いように眉をよせる。

どうも他の妃連中は揃いもそろって気位が高いのか、自分たちに近い侍女はともかく、その他の女中の扱いはそれほどよく無いらしい。やってきた女中に名前を尋ね、彼女らの仕事ぶりに礼を言うだけで翠に好意を抱いてくれたので、正直、翠にしてみれば、この程度で『誑しこんだ』と言われるのは心外であったのだが。

もつとも、翠に回された女中は、ベテランの女中でもなく、気位の高い貴族令嬢でもなかったため可能であった手段とも言えよう。

……その人選に女中らの中で、湧いて出た『リーリア（位階最下位の妃）』の世話、という仕事の押し付け合いがあることは容易に想像がついていたので、それすらも計算の内であるのだが。

要するに……。ルカの表現は間違いではなく、翠の誑しこみが『故意』であった。そして、遠まわしにそれを察したことを翠に伝えてきたルカに、翠は眉をしかめたのであった。

普通であれば、翠のことをよく知らない連中……たとえば、『新しく入ったリーリアは優しい』などと噂する女中の上司たちは、翠の女中への扱いを、『リーリア』という卑しい出自ゆえに、女中からの世話に慣れていない為のものだと受け取るのである。

それすらも計算づくであつたハズなのに、目の前の男は易々と見抜いた上、それを知っていると宣言されたのだから、翠の一気にテンションも下がるハズである。

別に翠が親しくなつた女中を足がかりに何か悪巧みをしようとしているわけではない。ただ、アーガルといいながらも、本業との二足わらじで、ほとんど翠について居られないフィンに代わり、長時間翠の周りをうろろする女中たちである。仲が悪いよりは良いだろう、という快適のみを追求した結果であるだけに、裏を探るような態度をとられれば眉をひそめたくもなる。

「回りの連中は間逆のことを言ってるけど、リーリア、実はやんこ

となきお家の出身だったりしてね」

ルカがどこまで本気でいったのかわからない科白に、翠は内心で大きなため息を吐いたのだった。

登場人物紹介

シエリラム

宗教国家ヴァルモンドで信仰される最高神。創世の神。

下界をただ見守ることしかできない毎日に厭気がさして、天界から逃げ出した、とかなんとか。

倉橋翠くわはしすい

召喚当時21歳。名門国公立大の3年生。研究者志望で、根っからの理系人間。

「異世界の女を見てみたい」という霸王の我儘の所為で異世界に召喚される。

それどころか、スイ・ヴァルフォス・リーリア（王の月姫）として側室の地位を押しつけられる。

元の世界での生活は幸せだったが、執着はなく、戻ろうとあがくことはしない。

戻れないなら、せめて平穩に過ごしたいのに、なんだか上手くない様子。

ギルバート・ヴァルフォス・ド・ヴァルモンド

翠を呼び出した元凶にして、ヴァルモンドの王。

絶対的な魔力量で、大国ヴァルモンドの礎を築いた霸王。

周りの人間とちがい、簡単には媚び諂わない翠に興味を抱く。

黒髪に灰色の瞳。歳は32歳。翠曰く、見たまま、まごうこと無き王。

フィオルナル・アイシュ・エリツアールド

側室に3人認められる専属世話係「アーガル」。翠のアーガルの最

初の1人

神殿側名家出身の貴族階級で、本人も神学者であり、魔法学者。王宮では王につぐ権力者の1人、王宮魔法士長の位につく。

銀髪碧眼で、モノクルをかけた学者風。翠曰く、RPGでいう、白魔導師。

ルーカリアナ・バレット

翠付きの専属護衛。

一般階級出身。王が実力主義を取り入れたため、王宮に努めている。一見女好きする優男だが、裏のありそうな言動を繰り返す。

赤銅色の髪に金色の入った瞳。翠曰く、その見た目を利用して、あれこれやってそう。

アシュレイ・ドットイバル

翠の侍女。翠より5歳以上も若い少女。一般階級出身。家計を助けるため城に入った。

栗色の巻き毛で緑の瞳。

おっちょこちょいだが、それも愛嬌と思えるくらい勤勉で可愛い。

倉橋 真也 しんや

翠の弟。現在15歳で、受験戦争まつただ中だった。

反抗期は昨年終わり、現在は優秀な姉を慕うお姉ちゃん子。年に1度の外食を楽しみにする家族想いだった。

昼姫 カボネ：隣国王家出身。清楚な深窓令嬢。

第一夕姫 トウジエノ：神殿側名家出身。少々苛烈。

第二^ニ夕^ツ姫^{ヒメ}：公爵家出身。控えめだが、やり手と噂。

夜^ヨ姫^{ヒメ}：一般階級の女中あがり。存在感が薄い。

師^シ父^フ

宗教国家ヴァルモンドにおいて、唯一、王に意見できる権力組織『神殿』の統率者。

かつて、シェリラムの使者の声を聞いた人間の血筋を引くという。神殿関係者には魔力の強いものが多く、それだけ国内での発言力も増した。

その息子は先祖還りしたと噂されるほどの協力な魔力を持つらしい。

登場人物紹介（後書き）

もつちよっと増えますが、とりあえずの覚書。

好き嫌いの行方

「お前、バレットは好かんのか？」

「……そもそも好く好かないの問題じゃないでしょう」

今日も今日とて当然のように部屋にやってきた王に、翠は呆れた視線を隠さず向けた。

ハタから見れば、立派に王の「お通り」であるが、翠が殴られた日以降、ギルバートがコトを起こそうとするような素振りは見せず、寝室に視線すら向けないで、ただ椅子に座って茶を飲んだり、喋ったり。ようするに、グダグダと過ごして帰っていくだけである。

とはいえ、実体はそうであつたとしても、王が翠の部屋に通うのは紛れもない事実であり、対して他の側室のところに通っている様子は全くない。どうせ同じようにすぐ飽きられる、と思われているので今のところ大事には至っていないが、出自も知れぬリーリアが受ける寵愛に、後宮内で鋭い視線を向けられるのも事実。

翠自身、ギルバートに用などないし、関わり合いたいと思つわけもないのだから、そつとしておいてくれ、というのが本音なのだが……と、彼を伺い見れば、翠が適当に淹れたお茶を当然のように受け取って、当然のようにソファに身を落ち着けてしまっていた。どうやら、また、しばらく居座るつもりらしい。

「それでも、エリツアとは親しくやっていると聞くが？」

「右も左もわからぬ状況で、事情を知る数少ない相手にアレコレしてもらうことが多いのは当然では？」

そもそも、専用の世話係をいつけたのは自分自身であるはずなのに。それにしても、結局何を聞きたいのかが分からずに、つつけんどんに返事をしてしまう。

「ふん。お前を誰が一番に世話してやっているのか、忘れたわけもあるまい？」

「過去の栄光にしばられているだけでは、国は滅びるわよ？」

思い起こしても、翠の認識の範囲で王に世話されたのといえ、妃の座をおしつけられたことと、フィンをアーガルとして指名してもらったことくらいだ。後者は感謝の対象にもなるうが、前者に至っては迷惑以外の何物でもない。

そもそも、この世界に興味本位で呼び出されたことそのものが、迷惑であるが。

リーリアとしての部屋や、衛士、侍女などは、肩書にセットになっているものであるし、その人選についても別に特別世話をされた覚えはなかった。ル力に至っては、何か裏があるのか、とすら思っているくらいなのだから。

「相変わらず可愛げのない。嫁のもらい手のない女をもらってやつただけでも一生感謝されてもいいくらいだが」

「あいにく、私の世界では女は1人でも生きていけたの」

特に翠に至っては、大学生ながら研究の内容やその出来から、教授陣にも覚えがめでたく、院への進学やその後の研究所への配属まで、このままいけばほぼ安泰だと自他ともに認めていたくらいである。

「それこそ国が滅びそうだな」

「……」

まあ、確かにそうかもしれない。少子高齢化なんてワードは、小学生でも知っているだろう、よく聞く言葉になってしまった。

また厭味でも返ってくるのかと思えば予想外の切り返しで、思わず翠も反応につまる。

そういえば、目の前の御仁は、ただの好色家でもなく、傀儡でもなく、武力のみで恐怖政治を敷く独裁者でもなく……否、独裁者には変わりないが、それでも国をまとめるだけの手腕と恐怖以外でも人を引き付けるカリスマを持った、まごうこと無き王であるのだろう。

翠の身に降りかかった迷惑を水に流すことなどではしないが、その事実についてはこの世界で間もない身でも理解していた。

王は、自らを王としか見ない周囲の人間に辟易してはいるが、それは自らを王として見せる力量があつてのことなのである。

「どうした？」

「いいえ。……アナタのような人でも、多分、きっと、絶対に。苦労したのしょうね。私には想像もつかないようないきなり飛んだ話しに、王が怪訝な顔をする。」

「なんだそれは」

「アナタのことを知らないのに、こんなことを言うのは変だと思うけど。でも、敵も多かったんでしょね、なんて考えてしまったの」「敵は多かったのではない。多いのだ」

今、現状。覇道を貫く彼の向く先には、まだ統治下のない周辺諸国があるのかもしれない。

……でも。

「それは、アナタが敵に回したんでしょう？　そうじゃなくて。どちらだか分からなくて、信じようとしたり、疑おうとしたり。若い時には裏切られたり。そういう、巡り合いになりたくないような敵が多かったでしょう、と思って。……いえ、いいわ。こんな話、するもんじゃないから」

一方的に話を打ち切って、王が空けたカップを持つ。もう1度お茶を淹れなおそうと立ち上がった。

「まるで、見えているように語るのだな」

「……いいわよ。ちょっと踏み入りすぎた」

人の過去など訊くものではない。これでは翠が王について知りたがっているようではないか。そんなこと、あり得るはずがないのに。翠はこの国の常識を学んでいるが、それは国に愛着があるわけでも、知りたいと思ったからでもない。ただ、周囲から浮かないため、自らの平穩のためである。

王はルカを好きではないのか、と聞いた。それに翠はどちらでもない、と返す。

それに嘘は一切なかった。否、ルカだけではない。アシュレイも、ギルバートも、その王が仲がいいと揶揄したフィンでさえも。翠は

一切の執着も、興味も関心も、湧いてはいなかった。

話を切り上げようと、王すら見ないままに告げた翠の背後で、王もまた、呟いた。

「俺は先代の王を……父を、それに仕えた兄を、弟を、姉を、妹を、すべて殺した」

でしょうね。後宮すら備えた、一夫多妻制の国であるのに、先代の息女たちの噂はもちろん、王兄や王弟の話など訊きもしない。話に出る権力者は、王家遠縁や貴族、あとは神殿や後宮の妃たちくらいである。

それでも。

翠はその、懺悔に似た響きを聞かなかったフリをした。

好き嫌いの行方（後書き）

遅くなりました。

後宮で生きる女

翠がこちらの世界にやってきて、ひと月が過ぎた。そうこうしている内に、翠も異世界の事情になれ、毎日・毎週のきまりごと、というのが分かってくる。たとえば、白の日の礼拝の時間は、いつも不定期に突然やってくるハズの王が、毎週通ってくるということ。たとえば、仕事の合間に必ず顔を見せにくるフィンの休憩時間のサイクルだとか。たとえば、毎日扉の前に張り付いているル力が、休みなのか別件なのか、緑の日はどうやらどこかへ行っているらしい、ということ。

そして今日、赤の日の昼前に、翠が庭園を散歩することも、週の中では決まりごとと化していた。

ル力とあまり接したくない翠が、しかしフィンの仕事を邪魔するのも憚られた結果、自然、部屋に引きこもってしまったことにたいして、フィンが苦言を呈したのがきっかけであった。

いわく、妃が部屋に籠ると余計な噂がたつ、という。

それを聞いて、翠が思わず呆れた表情を浮かべてしまったのは仕方のないことだろう。王が翠の室に通っているのは、ハタ目に見て

は明らかであるし、実際に何もないとはいえ、ある程度煙が立つのは仕方ない。に、したって。

一か月経つか経たないか、では些か、噂も性急すぎるだろうに。

とはいえ、全く身に覚えのないことで命を狙われることなどまっぴらごめんであるし、それならばフィンの言うことには従っておくのが身のためであろう。

結果、お互いの妥協点をさぐり、フィンが休みをとれる赤の日の午前に庭園を散歩することになった。

実際は、行動時間が把握されれば罨も仕掛けやすいので、あまり勧められることではない、と苦渋を示したフィンだったが、どうせついてくるのだから、とすべてをルカに丸投げした翠に言いくるめられた。

そうして、今日もフィンとルカを連れだって、庭園を歩いていたのだが。ふと、現れた人影に翠は首をかしげた。

フィンが若干の警戒を見せるが、相手は身なりから察するに、どうやら妃であろう。出入り自由な庭園で妃を見かけて警戒しては、

さすがに相手が可愛そうである。

「あらアナタ……見慣れない顔。でも、格好が上品だし、この庭園を供を付けて歩いている、ということは、側室なのね。ジペットかしら、それとも最近噂のリーリア？」

「エリツアールドとバレットが付いている、ということはリーリアでしょう」

おっとりとした微笑んで首をかしげて見せた女性に、後ろの男が応えた。

ゆったりとした佇まいを見せた女性は、温かみのある胡桃色の髪をハーフアップでサイドに編み上げ、新緑のような若草色の瞳を好奇心で揺らしていた。華美を好まず、機能性と着脱の仕方を中心に服を選び、アシユレイをいつもガツカリさせている翠とは違い、しめつけのキツそうな薄青のドレスを身にまとい、朝早くから御苦労なことだと、内心で翠を唸らせてはいたが、しかしそのドレスを着こなしてすら、ゆったりとしたイメージに何の影響も与えない、堂々とした妃の風格を身にまとうていた。

これが序列1位の力ポネだろうか。後宮の事情にとんと疎い翠がどう返していいものか悩み決めかねている間に、理由を悟ったのか、フィンが耳打ちをしてくれた。

「お初お目にかかります、トウジエディ（第二夕姫さま）」
相手はどちらかといえば目上にあたるが、僅かにスカートを持ち上げるだけの簡易の礼で返す。必要以上にへりくだればナメられると前もってフィンに言われていたからである。もっとも、対妃用の知識を必要としたのはこの1月で初めてのことであったが。

「そういえば、魔法士長には婚儀の礼で会ったことが会ったわ。息災で。と、いうことは、そちらがバレットね？ よく知らないけど、ウチのが知っているということはそれなりの階級の方なのね。初めまして」

トウジエディはフィン、そしてルカにキラキラした瞳を向けると、自分も簡易の礼をとった。2人もそれに簡易の礼で返す。一応翠のアーガルであるフィンが、リーリアである翠と同じく簡易の礼で許されるのはおいておいて。リーリアはもちろん、トウジエディにも膝をつかないルカは、果たしてどのくらいの地位に居るのだろうか。魔法士長の地位にいるフィンに聞けば分かるだろうが、興味がないので聞きもしなかった。

「こちらは私のアーガルのアールとロイ。ふふ。確かリーリアが宮に入ったのはひと月前よね？ それなのに今日が初めまして、なんて。おかしい感じ」

トウジエディは自分の背後の2人の男を指すと、おかしそうに笑い声をあげた。邪気なく見れば、まるで少女のような可憐な微笑みであるが、それがこの後宮に長く居座っているトウジエディから発されたものであることを加味すれば、とたんに胡散臭く見えてくる。

「初めまして、リーリア。アルガール・スフィオールと申します」
「ローウィードです」

トウジエディを何とはなしに見つめていた翠に、その背後の2人が礼をとった。こちらも簡易なもの。始め、トウジエディに耳打ちしたのがアルガールと言う男だろう。金髪碧眼。絵に描いたような海外の男子。……もっとも、日本在住の翠にしてみれば、だが。対してローウィードと名乗った方は、黒に近い濃い灰の髪に濃紺の瞳。寡黙そうな様子を隠しもしなかった。ルカに似た気配をしているし、貴族風の装いのアルガールと違い、機能性のみを追求したような着物を着ているから、護衛担当なのかもしれない。

「私が宮に入った頃と違って、今は形式だけの婚儀の礼もしないの
でしょう？ 入れ替わりが激しいからって、新しく来た妃を歓迎す
る式も開かないんだもの。側室だって花がないと飽きちゃいそう」

あまりに出入りが激しいので、随分前の妃から、婚儀の礼も歓迎
の式もその習慣が廃れてしまった、という話は前にフィンから聞い
ていた。とはいえ、新しく妃になったリーリアの顔を見に来ること
もなく、新入りとして翠自身が挨拶周りに行く必要すらない、とい
うのはあんまりな気もする。

とはいえ、目の前の妃が先に発した言葉には、もっと別のびっく
りポイントがあった気もするが。

翠よりだいぶ前に輿入れしたハズのジベットの顔も知らないとい
うのは、どういうことなのだろうか。

「とはいえ。最近はどう、妃なんて全然入ってこないし。珍しく仲
間入りしたリーリアのために、お茶会くらい開いてもいいと思うの。
参加してくれる？」

「はい？」

ニコニコと笑顔で、さも名案とばかりに告げられ、翠が首をかしげる。

「お言葉ですが、トウジエディ。そのお茶会、一体誰が参加するのです？」

「んー？ そうねえ、ジペットは、人前に出てくるハズがないでしょうし……。トウジエノはリーリアと席を同じくするなんてゴメンよ！　なんて、言いだしそうね。カポネなら……。来てくれないかしら？」

「彼女はよくても、そのアーガルの前にリーリアをお出しするわけにはいきません」

首をかしげたトウジエディをフィンが一言で切り捨てる。

「あら、そう？　ちょっと権威主義だけど、所詮虎の威を借る狐だと思っただけだ。まあ、それを御せないカポネは問題でしょうけど」

トウジエディは呟いて、クツクツと笑い声をあげる。笑顔は無邪気だが、言っていることは不穏極まりない。顔が引きつりそうになって伺った、まるで動じない周りのように、これこそが『後宮を生き残ったトウジエディ』の本性なのだろう、と内心で息をついた。

今の話だけでも考えるに、ジペットは長い付き合いのトゥジェディでも顔をしない極度の引きこもり。トゥジェノは些か苛烈で身分に煩そう。カポネは本人はともかく周りの人間に問題アリ、かつ、それを統制する力まではない、ときた。

あまりに放任すぎる後宮の様子に、一瞬それはどうなのか、と思わないでもなかったが、周りの面子を考えれば、リーリアにとつては今の状態が1番平和なのかもしれない。今でも周囲の女官や誰のか知れない侍女からの視線が痛い時はあるのだ。これ以上平穩が崩れないことを望んでもバチは当るまい。

結局、成り行きで週末にでもトゥジェディとお茶をすることになってしまったが、その程度の被害で済んだのは重畳だろう。週に1度の散歩すら面倒になりそうだ、と些か早く切り上げた散歩の後で、アシュレイの淹れた茶を飲みながら、翠は大きく息をついた。

側室の憂鬱

「アレに何もされなかったか？」

「随分耳がお早いね。なら、何もなかったことも聞いているでしょう」

その日の夜、またもひょっこりと顔を出した王に、あえて迷惑そうなる素振りを隠しめせずに出迎える。

アレ、と言うのは朝に出会ったトウジェディのことであろう。

「ふん。エリツアがお前をどう教育しているかには興味もないが、この後宮で一番タチが悪いのはアレだ。せいぜい目を付けられないことだ」

正直、言われるまでもないことだ。トウジェディと別れて部屋を戻って来た後で、いかに事なかれ主義の後宮とはいえ、今日のように突然バツタリ出くわした時に相手のことを全く知らないのも不味い、と思ったのか、フィンが側室たちについて懇切丁寧に教えてくれた。

それを聞く分にしたって、翠がトウジェディの物言いから受け取った第一印象と、そう変わるものもない、よくいえば個性豊か、悪く言えばクセのつよい妃たちである、という印象を変えられようはずもない。

そんな中で、一応の人あたりもよく、位階最下位のリーリアに対してもバカにした様子がなく、あまつさえ茶にさえ誘い、またアールガルたちも翠を侮らない、目が行きとどいているのだろうことがよくわかった。

やり手、といえば聞こえはいいが、敵に回った際に油断できる相手では決していないことくらい、僅か四半刻の邂逅の間にさえ、しっかりと理解できる。

なにより、そんなクセのつよい妃たちの中で、元々良家の出とはいえ、後宮に残っているという事実だけでも、要注意人物に違いないのだから。

とはいえ、一応の夫が言い切った言葉に呆れの感情は浮かぶ。

「タチが悪いって……。一応アナタの側室でしょうに」

「だから分かる。何の目的か。俺の寵愛は欲しがるが、俺を敬ったりは決してしない。ただ正妃になりたいだけかと思うが、アレは権威や名誉にすら興味が無い。目的が掴める人間は、先が読める。アイツは目的が読めないからこそ、どう動くか分からない」

「アナタでも人の先を読んだりするの」

ふと、驚いてしまつてつい、言葉を漏らす。その言葉に何を思ったのか、ギルが翠をにらみつけた。

「どういう意味だ。お前は先すら見えない王が、覇道をいけると思
うのか」

「いえ、ギルが無能と言ってるんじゃないの。でも、アナタは考
えるより、感じる方が得意でしょう。相手の動きを読むより先に、な
んとなく、相手の動く方向が分かる、そんな感じじゃないの」

弁明した翠の言葉に、ギルは予想外だったのか、キョトンとした
表情を見せた。

「よく分かったな」

分からない方がおかしいだろう。普段話している分に、感じるこ
とはそうないし、翠がハタから見て命知らずな暴言を吐いたとして
も、殴られたのは最初の夜が最後である。が、一方で、相手は気に
入らないというだけで、妻の首を切る苛烈で非道な一面を持ってい
る。どう考えても、考え尽くすことが先に来るような、理知的なタ
イプとは言い難い。

とはいえ、その動物的なまでと言える勘が鋭いからこそ、この男
の覇道があったのかもしれない、と思えば、それこそがギルバート
という王の、王たる由縁なのであろう。

「でも、アナタはカツとなるタイプではあまりないでしょうね。感
情で行動を起こす時でも、そのリスクを常に計算していそう。決

して無茶をできない場面で、感情に任せて行動を起こすことはなさそうね」

「なぜそう思う？」

「アナタが王だからよ」

それは、なにも肩書のことを指しているわけではない。王の器を指していた。

この世界に來たばかりで何を言う、と思われるかもしれないが、ギルバートが王位簞奪の前に、不穩分子として切り捨てられなかったのは、何も彼の武力のおかげだけではないだろう。

それだけの武力をそろえられるまで、期が熟すまで、じつと耐え忍んだ事実が必ずあるに違いない。決して、一時の感情だけで王位についたのではない。

王位を實力で手にし、それを守るだけでなく、攻めの姿勢を貫きとおせた。

彼の過去は、その器を如実に表していることだろう。

「ふ、……ハハッ」

何がおかしいのか、不意に王が声を漏らして笑い始めた。顔を手で多い、クツクツと肩を揺らす。

「何か変なことでも言ったかしら？」

「い、いや。何も言っていない。お前はそれでいい。そのままにいる。……決して、俺の妃たちに汚されるなよ」

自分の妻を捕まえて何を言っただ、と思わないでもなかったが。

「言われずとも」

本心そのままを返しておいた。

翠が誰かに翻弄されることなど、それも情の取り合いで追いつめられることなど、ありようはすがないのだから。

側室の憂鬱（後書き）

メリークリスマス！

強さの証明

その日、翠はいやいや王宮の廊下を歩いていた。目の前では、翠を先導するようにルカが先を行く。何かを言付けされたように黙々と前に行くルカの姿に、つい、自分だけ今すぐ振り返って走り出したい衝動にかられたが、そんなことをしても無駄だろうということは分かっているので、仕方なく後に続く。

事の発端は今から半刻ほど前にさかのぼる。

翠は、アシユレイに応援されながら、フィンに出された膨大な宿題を片付けていた。

正直、物覚えの各段にいい翠であつたので、フィンによる、国内事情の勉強について、授業中に習ったことを後に忘れたことなどない。ないのだが、どうも学者思考のフィンは努力を好むようで、毎日嫌というほどの宿題を押しつけて行く。

とはいえ、翠自身、日中にするなど何もないし、宿題に手間どることもなかったので、今日も今日とて、対して考えもせず、ペンを動かしていた。

そんなとき、ルカが外から声をかけたのだ。

いつの間に交代していたのか、ルカが離れていた間、代役を務めていたらしい兵士を部屋の外へ置いて、自分は室内に入ってくる。

そうして、少し視線を落とした先の翠に向かって、いつもの軽薄な笑みを向けた。

「陛下が呼びだよ。夕食を共に、だつてさ」

そこから先は大変だった。

アシュレイが盛り上がり、あれよあれよ、という間に準備を整えられてしまう。

とりあえず、翠には締め付け型のドレスを拒否するのだけで精一杯であったことだけ特筆しておこう。

そんなこんなで、準備を万端に整えられてしまった翠を見て、ニツコリとどこから生成されるのか分かったものじゃない、甘い言葉を吐いたルカは、翠を案内する、といって先を歩き始めたのであった。

「よく来た。……珍しく整ってるじゃないか」

いつもとは違い一応部下の目もある場、とはいえ壁際の兵士らの他は、給仕の侍女と、侍童のような少年がいるのみで、ルカも用事があったのか、翠を案内した後はどこかへ消えてしまった。それが原因かは分からにあが、最初1言を威厳をもって発した他は、いつも通り、ニヤリと笑んで軽口をたたいた王に、翠はため息をつく。

「普段は手抜きで申し訳ありませんね」

他をそう、整えた覚えがないので、おそらく髪型のことを言っているのだろう。

高いところで結われ、アシユレイによって器用にアレンジされた髪は、普段の下ろしたままとは違い、どちらかというと控えめな翠の顔の印象に華やかさを添えていた。

もっとも、普段王が翠を訪ねてくるような時間帯にまでしたいと思っような髪型ではない。

「俺は頭を撫でやすい髪型も好きだが？」

「頭を潰しやすい、の間違いじゃ？」

「潰したことがあったか？」

潰せそうな手の平と力と、潰しても同時なさそうな図太さを持つておいて、何を言っているのだから。頭を鷲づかみにすることは、一般には撫でるとは言わない。

とはいえ、翠の心中は王には届かなかったようで、ギルは怪訝な表情を浮かべただけであった。

「まあいい。冷める前に食事にするぞ」

「どうして呼んだの？」

「悪いかな？」

良い悪いの問題ではない。翠もここまで来て拒否する気はなく、ギルに促されるまま、大人しく対岸の席についたが、本心からすれば、食事になど呼んでほしくない、というのに変わりはない。

翠が世界にきて1月半が経とうとしていて、つい先日にはトウジエディの茶会に参加したことで、その交友関係が瞬く間に広がった。王は未だ翠に飽きる様子は見せずに、ハタから見れば、寵愛を与えられ続けている。ハタから見れば。

正直、これ以上翠を排除するような名目を創ってほしくはない、というのは翠の本音である。世界に執着はないし、深入りも憎みもするつもりはない。とはいえ、大きな問題なく平穩に過ごしたいと願うくらい、当然のことだろう。

「俺は俺の好きにする」

ギルの言葉に翠は諦めの想いと同時に息をつく。

そんな様子にギルは満足したように鼻で笑うと、ふいに視線をずらした。

と、その視線に応えるように、王の席からほど近い席に、部屋の隅に控えていた幼い侍童が座り、それと同時に侍女が少年の前に食事を並べ始めた。

「……王、彼は？」

「ジナオラだ」

「……そういうことは、私のくる前に済ませておいて下さい」

つい、尋ねてしまった翠に、しかし王は意図を理解して、あえて方向違いの返事を返す。

翠が尋ねたのは、この侍童が何をするため、どうしてここにいるのか、ということでも、もっとも、翠自身、自分で判断したことの確認のための問いであった。

それを見通して、違う答えを返した王にも呆れつつ、翠は質問を重ねることを辞めて不服だけを述べる。

「何か問題でも？」

どういうつもりか、意地の悪い問いかけをするギルに、翠はため息をつく。

「食事に來たのに、とりあえず待ちぼうけを食らわされるものじゃないでしょう」

「はっ。そうか……ならば後で好きなだけ食べ」

ここは王宮であるし、王が常に命を狙われる存在であるのも知っている。ジナオラ、と紹介された彼、毒見役の少年は、必要な存在なのかもしれない。

とはいえ、少年時代にいくらかでも命を奪われる経験にあつて來たであろう王である。わざわざ他人を使わずとも、自分で判断できるであろうし、ある程度のものでなら、十分な耐性すらあるかもしれない。

否、そんな能力面の問題以前に、そもそもこの王は実際に食べて見せたところで、目の前の少年を信じるのだろうか。翠にはそのようには思えなかった。

だとすれば。

ギルがあえて、毒見を第三者にやらせる理由。

自分の権力を見せつけるためなのか。それとも、翠へのパフォーマンスか。

侍女たちの慣れた様子から見れば、おそらく後者はないとみえる。ギルバート自身に自覚があるかどうかは分からないが、この人は

どこかで他人を犠牲にし続けないと、満足できないのかもしれない。不安になるのかもしれない。

王と呼ばれる絶対的な権力と、覇道をいく絶対的な力を手に入れ、なお。他人を犠牲にしつづけることに、自らの強さを実感できるのかもしれない。

真実は分らない。

どんな真実であろうと、日本という平和な国で生まれ育った翠からすれば、悪趣味なことに変わりはない。

けれど、どんな真実であろうと、ヒトとは違う、ホンモノの感覚では、至極どうでもよいことであった。だから。

翠はただ、惚けて首をかしげた。

一瞬、息をつめて見せた王は、そのあと笑い声をあげる。何が面白いのか、依然、肩を震わせたまま、なぜか、至極いとおしそうな目で。

翠が咄嗟に何か、嫌な予感を感じて視線を逃がしたような目で。翠の姿を捕えたのであった。

毒見の少年

「君、何モノ？」

まったく乗り気ではなかった晚餐をなんとか終え、部屋に戻ろうと廊下を歩いていた翠は、突然、目の前に現れたジナオラにそう言われ目を見開いた。何のためらいもなく、毒見を終えたジナオラはすぐに晚餐の間から出て行き、そのあとどこに行ったか知れなかったが、どうやら後をつけられていたらしい。

そういう翠はいえ、室まで送らせる、と広間にいた兵士をつけられそうになったが、部屋までそう遠くもないし、なにより本来その役目を担うハズのルカが未だ姿を消していたため、遠慮をした分もあって1人で歩いていた最中であつた。

ジナオラの問うた意味はまだ掴み切れていないが、とりあえず。

護衛が付かなかつたことで、後をつけられる隙を与えてしまったのか、それとも護衛がいらないおかげで、不穏な話を聞かれずに済んだのか。今の時点では幸か不幸かも分からない。

「どういう、意味？」

とりあえず、掴み切れなかつた意図を知るために、質問を返してみる。

さすがに晚餐も終えるくらいの時間帯。通常出仕しているハズの役人たちの姿は見えない。もっとも、居たところで妃の室や王も使う広間にほど近い廊下を通れるような重役たちなら、元から人数は

多くないが。人気のない廊下に、翠の声が響く。

「リーリアは異国から売られてきた奴隷の出身で、この国の言葉も文字も分らない……そう、だったよね？　そして、それを補うために自動翻訳の魔道具をつけている……」

ジナオラの言葉に翠は静かに頷く。それが真実を知る者たちの間で示しあわされた、翠の偽の過去であった。

「ったく、どうして周りの皆は気付かないのかなあ？　こーんなにあからさまなのに。……リーリアの口は、そのまんま、この国の言葉を喋っているっていうのに……ね？」

その言葉にさすがの翠も言葉を失った。取り繕うことなどとはや不可能。彼は確信しているのだろう。その確信を与えられるだけの時間、自分は言葉を発していたと知っている。

……うかつだった。

確かに翠はこの国の言語も文字も、理解できていた。そして、それを遣うことも可能であった。自動翻訳機が外されたときには意識して日本語をつかっていたが……。そうでないときはこの国の言葉をそのまま話してしまっていたのだ。

自動翻訳機は装着者と、装着者の周囲にいる人物の意識から、その母国語を把握する。受信の場合は、装着者に聞こえる範囲のすべての言語を装着者の母国語に一括翻訳するのだが、発話の場合は声の届く範囲に居るすべての者の母国語を抽出した中でもっとも話者の多い言語に翻訳する、というものだ。

なので、少数派の言語の話者がいる場合、大人数の中では言語を聞き取れないという弱点も存在するが、共通語が存在するこの対力で、特殊な民族だったり、かなり遠方の国の出身だったりしない限り、そんなことはまずあり得ない。実質、自動翻訳機も、共通語が浸透しきった現代においては、通訳に使われると言うよりは、神殿関係者が神語を学習する際の補助器具としての用途が大きかった。

そんな自動翻訳機を使つての翻訳は、話者が言語を発した後、相手の耳に伝わるまでの空気中で、音の振動を調整して行われる。したがって、話者の唇は本来話者が発した言語の通りに動くのである。確かに、『発された言語の通りに唇が動く』という事実は、普段何のことはない当然のこととして周囲に受け止められているため、気付かれにくいことに救われたが、翠の事情を知っていれば、その違和感に行きあたるものは、遅かれ早かれ、いずれ出てきただろう。……目の前の、彼のように。

「言葉が通じないフリして、どうするつもりだったの？ 道具をハズされた君の前では、王たちの口が軽くなるのを期待していた……？」

じりじりと、目の前の少年が無邪気そうに、しかし、その心中は獲物を追い詰める狩猟犬のごとく、翠を追い詰めているのが分かっていて。このままでは不味い……。

「っ……そういうアナタは……どこの国の影なの？」

主導権を握られていると判断した翠は質問に答えるより先に、主導権の奪還を試みた。かくして、その目論見は功をそうし、ジナオラは目を見開く。

「あら、感情を殺すべき影がそんな驚いた顔をしているの？」

この好機を逃すことなく、しかしカマかけが功を奏した興奮を悟らせぬように、言葉が続ける。

「……なぜ、分かった」

そう、翠の発言はカマかけであつた。正直、当たるかハズれるかは五分五分といったところ。外れた場合は翠がハツタリに賭けるしか逃げ場のないことに気づかれ、もはや勝敗は決していたに違いなし。しかし、なんとかその賭けに勝った翠は、崩れかけた余裕をもう一度表情に纏つて薄く微笑んで見せた。

「アナタも気付いたでしょうけど、私は特別製なの。この国の人間は神殿に祭られる神への信仰を未知なる力の理由にして魔法という空想の具現の寄り代にしている。だからこそ、神殿出身者には優秀な魔法士が多いし、信仰の度合いによつて魔法の力も左右される。これは、ハタ目でも明らかなのだけれど、イマイチ認識されていないのは、信仰が深層心理に寄らなければならないもの、だからかしら。口では神を信仰するといい、毎週の礼拝には必ず参加をしても、心の内では神への疑問を抱く。そうであれば魔法は弱いものになるでしょうから。それでも、神殿出身者に優秀な魔法士がおおいののは周知の事実。だからこそ神殿の権力が増し、この国に宗教国家の一面を与えている。そして、その根底があるからこそ、魔法士が生み出され続けるのも事実。……無限ループね」

世界へ来て1カ月。日常生活で魔法に触れることが少ないために始めは気付かなかったが、国一番に魔法士としても名高いフィンと触れあう内に、その魔法の仕組みについて理解していった。魔法を使われると同時に、これほど至近距離だからこそ感じる、自分への僅かな呼びかけの声。正直、居心地が悪いし、そんな魔法を好きにはなれなかった。

……そんな中で。

「そんな国で唯一の例外がいる。宗教国家の一面を持つ、この国の頂点に君臨し、しかし神などいないと豪語する現王ギルバート。彼だけは、信仰心を魔法の礎とするこの国で、絶対的な自らの力の信頼を礎に魔法を行使している。……まあ、それだから神語に通じる魔道語は解していないし、魔法研究はてんでダメのようだけれど。とりあえず、この国での例外は、本来なら彼1人でなければならぬいの。神への信頼を魔法の基礎とすることは、誰に教えてもらうことでもないのでしょうけれど、日常生活の中のささいな宗教的慣習が、習わずとも体に覚えさせていく。だからこそ、心の中で信仰しないものは、魔法の才がないとされるだけ。間違っても、王のように別の方向で力の行使なんてできない。彼にそれが可能なのは、彼が王族であって、いつ対立してもおかしくない神殿への不信心が、この国での信仰心と同じように自然に体に染みついていたから」

だからこそ。翠は目の前で立ち尽くすジナオラを見つめる。

「だからこそ……アナタのように信仰のない、しかし強い魔力の残滓を纏った優秀な魔法士は、すぐに他国出身だと分かるわ」

そして、覇道の傍ら御した国は多くとも、その中に見えない敵も多いこの国のこと、同盟国であつても入国するのは容易ではない。それなのに、優秀な魔法士でありながら、使い捨てられる毒見の立場に身を落ち着ける、身分を偽った他国出身者など、考えるまでもなくスパイであるのだ。そこところは、言わずとも相手も分かるであらう。

「……何が目的？ 僕がスパイだってバラして、僕が殺されるのを見て嗤いたいわけ？」

少年のようなジナオラ幼い顔が、鋭く影を落とす。その言葉に翠は苦笑して首を振った。

「まさか。……焦る必要はないでしょう？ アナタは私の秘密も知ってしまっているんだもの」

余裕を取り戻していながら、翠が自らの秘密を認めた事実、ジナオラは目を見開いた。

「へえ……同業者？」

「それはどうかしら？ 私を同業者として密告する場合、それがハズれていた場合に、アナタは取り返しのつかないミスを犯すことになるってしまうから、お勧めはしないわ」

例えばジナオラが、ギルに対して翠をスパイとして糾弾した場合、翠の隠された出自を知るギルは2人のどちらを信用するか、など問題とせず、言葉を話せる不審にも動じず、ジナオラの嘘に気づくだろう。

異世界から召喚し、それ以降、他国に行くことなどなかった翠が、他国でスパイ任務を受けてヴァルモンドにやってくるなど、荒唐無稽もいいところである。一方で、翠の言語の問題については、喋れることを隠していたことは不味くとも、だからといって翠の出自への信用に影をおとすことはない。

そうなれば、翠は何もしていないのに、ジナオラは自爆し、死んでいく。

別に目の前の少年を殺したいわけではないので、翠は静かに首を振った。

「だったら何？ 僕を脅して何か得があるの？」

「どうしてお互いに隠し事が1つずつバレている段階で、私の方が

絶対優位なの。今はイーブン。だから、お互いがお互いのために口をつぐむ……それでいいじゃない？」

翠の言葉にジナオラは見極めるような視線を翠へ向け、次いでため息を1つ落とした。

「分かった。とりあえず、君のことはよく分かんないし、今は、お互いにイーブンのままで……。でも、いつまでもこのままだと思わないでね。君と違って、僕はいつでも逃げ出せる」

そう言った瞬間、姿を消してしまったジナオラに、翠は痛いところを突かれ、重いため息をついた。

所詮、自分に逃げ場はない……。王の気ままに飼い殺される猫にでもなったようで、自室までの廊下を苛立たしげにいくのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3583y/>

スイ様の言うとおり！

2011年12月27日20時06分発行